



JSPS London NEWSLETTER

No.78
2025 Spring



A stunning and innovative space at the Design Museum by Yasuko Yamada

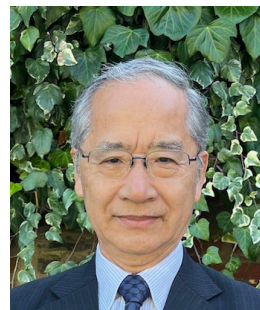
Contents

- | | |
|--|---|
| 1 センター長の英国観望
第15回「今後の展望」(2) そして終章 | 38 Alumni Awardee Meeting |
| 5 巻頭特集: AMS-JSPS Symposium | 48 機関紹介 “Design Museum” |
| 8 Cover Story: JSPS-RSE Symposium | 49 Events organised/supported by JSPS London |
| 12 創立30周年の軌跡(II) | 50 JSPS Fellowship Programmes & International
Collaborations Application Schedule FY2025 |
| 29 Activities of JSPS UK & ROI Alumni
Association (2004-2024) | |

センター長の英国観望

第15回 今後の展望 (2) そして終章

ロンドン研究連絡センター・センター長
小林 直人



1. はじめに - 4年間を振り返って

2021年5月にJSPSロンドン研究連絡センター長を拝命してから早くも4年が経ちます。この間英国の社会や学術研究界そして世界にも大きな動きがありました。

まず王室関係では2022年6月にエリザベス女王の即位70周年を祝うプラチナ・ジュビリーが盛大に行われ英国中が祝賀ムードに包まれました。しかし秋には女王の健康が悪化し、9月8日に逝去されました。国中が12日間の喪に服し弔問には長蛇の列が連日出来ました。9月19日にウェストミンスター寺院で国葬が執り行われました。翌2023年5月6日にはチャールズ3世の70年振りの戴冠式が行われました。

一方2024年6月には天皇皇后両陛下が26年振りに来英されました。気持ちの良い天気の下、両陛下はバッキンガム宮殿での晩餐会などの行事の後、最終日に昔の留学先のオックスフォード大学を訪問され、そのまま帰国されました。英国民に大変爽やかな印象を残されました。

英国社会の変化といえばコロナ禍が終わった後のBREXITの本格化です。2021年の秋には早くも物不足・労働者不足で英国経済は大きな影響を受けました。また2022年2月にはウクライナ戦争が、2023年10月にはイスラエル・ハマス戦争が起こり、TVは連日その報道で一杯になるとともに、2023年には最高11%に上るインフレの影響で、交通や病院などでストライキが多発しました。



図1. 左上: プラチナ・ジュビリーのエリザベス女王 (2022年6月), 右上: ご来英の天皇皇后両陛下 (2024年6月) (写真はTVより), 下: マンチェスター大学での事業説明会 (2025年2月)。

そのような中、大学ではBREXITの影響でEUからの留学生が半減しましたし、学術研究界にあってはEUの研究助成プログラムHorizon Europeに数年にわたって参加出来ずに研究者は苦勞をするなど、研究にも大きな影響が出ました。

さて我々JSPSロンドン研究連絡センターの活動ですが、この4年間は正に「起承転結」であったと言えます。

「起」としては2021年度のコロナ禍終了後からの活動再開になりますが、年末にはオミクロン変異株の流行で再度在宅勤務が奨励されるなどオンラインの活動が主体でした。そのような中ロンドン市内の幾つかの大学の日本人研究者を訪問して色々お話を聞きたのは参考になりました。

「承」は2022年度ですが、やっと大学訪問が可能になり、この年度で全部で9大学で事業説明会をすることが出来ました。特に年度末にはスコットランドの2大学訪問も行いました。ただ日本へ送り出すフェローのためのPre-departure会議はまだオンラインで開催となりました。

「転」となる2023年度はやっと全ての活動が順調に展開して、コロナ禍の前の状態に戻った年と言えるでしょう。この年は全部で14大学で事業説明会を開催できましたし、その中にはアイルランド・ダブリンの2大学、キプロス国立大学も入っています。2回のPre-departure会議、在英日本人研究者のための「サバイバルセミナー」、4回のシンポジウム・スキームなどを全てを行うことが出来ました。

そして最後の「結」となる2024年度は、従来の行事に加えて、9月にロンドンとオックスフォードで、12月にエディンバラでJSPSロンドン・センターの創立30周年、JSPS英国・アイルランド同窓会創立20周年の記念行事を開催出来ました。これまでの活動を振り返るとともに、英国の研究助成機関や同窓会との絆を強める良い機会となりました。

これまでの日英の共同研究による共著論文数は英米、英独、英中などと比べると少ないのですが、被引用度などの論文の質は日英が他を凌駕しています[1]。これは両国が優れた分野で相補的な協力を行っている結果だと思っています。このような日英の連携を強めることが両国の学術研究の将来にとって極めて重要ですが、前号にも書いたように特に「卓越性」と「多様性」の追究が必須だと思っています。

センター長の英国観望

2. 英国の学術研究の特徴と日英研究協力のあり方

この観望記でも英国の学術研究の特徴を色々取り上げて来ました。ここでは、それらを要約して4つにまとめようと思います。

まず最初は(1)戦略性です。すでに学術研究、科学技術、あるいは産業に関する英国の国家戦略の一端をご紹介します。古い方から ①英国研究開発ロードマップ(2020年7月)、②イノベーション戦略(2021年7月)、③ライフサイエンス・ビジョン(2021年7月)、④国家AI戦略(2021年9月)、⑤ネットゼロ戦略(2021年10月)、⑥国家量子戦略(2023年、3月)などです。英国の戦略策定に関する特徴は、素早い決定、具体的な計画・実行、評価・見直し、次の段階へ、というPDCAのサイクルがしっかり回っていることです。また大学も熱心に研究開発戦略を作成しています[2]。

次は(2)大学の自律性です。第71号で報告しましたが、EUA(欧州大学協会)の2023年の調査報告では、組織・財政・職員管理・学術の4側面から英国は平均92(満点100)のスコアであり、ドイツ(ヘッセン州)の66、イタリアの60、フランスの47に比べて極めて高い自律性を示しています。これは英国大学の創立が古く、王立勅許状(Royal Charter)によって独立した学問共同体としての自治権が守られてきたという歴史的経緯が影響しているようです[3]。また英国の大学は大学の自治だけではなく、各大学の学部・学科・研究科の自律性も高いのが特徴と聞いています。

その次は(3)研究の効率性です。第70号でもご紹介しましたが、英国の研究は、高い効率性が特徴です。研究開発予算、研究者数などのインプット指標の世界シェアがそれぞれ2.7%、3.9%であるのに対して、研究論文数、論文の被引用数、最高被引用数(トップ10%)などのアウトプット指標の世界シェアがそれぞれ6.3%、10.5%、13.4%(2019年)であることは、研究を推進し成果を創出する効率性が非常に高いことを示しています[4]。色々な方からこの理由として ①上記の大学・学部の自律性の高さに加えて、

②綿密な研究戦略・計画の作成、③優秀な博士課程学生やポストドクの集積、④研究設備、研究機器などの効率的運用、⑤効率的な研究時間使用、などが挙げられるとのことでした。またオックスフォード大学のある物理学の教授は「長年にわたって培われた学問の伝統」の結果と言われていました。

最後は(4)一貫した「研究評価」です。英国では1986年のサッチャー政権での補助金削減政策に端を発した研究評価(RAEのちにREF)の導入以来6~7年ごとにほぼ全大学統一の研究評価を行ってきました。直近に実施された2021年のREF(REF2021)の結果については第68号で詳しく述べましたが、評価の対象として2014年から導入されたインパクトの比重が大きくなりました(20%→25%) [5]。次回予定されているREF2029では、評価指標が“Contribution to Knowledge & Understanding”(知識と理解への貢献)(重み50%)、“People, Culture and Environment”(人材、文化、環境)(同25%)、“Engagement and Impact”(社会との関わりとインパクト)(同25%)となるようですが、この変更は、研究文化や環境の重要性をより強調するものです。このうち研究文化のパイロット指標が最近決まり、研究機関は研究文化のための戦略、責任(研究の誠実性と倫理の最高基準)、接続性(学際的アプローチや社会連携)、包括性(研究環境の包括性、協調性)、開発(研究の実践、キャリアパス形成等)の5つの指標で情報を収集することになります[6]。前回に比べて研究を進めるあり方をより包括的に評価しようというのが大きな特徴です。このように長期にわたって継続してしている研究評価のやり方を、不断に改善して行く努力は大したものだと思います[7]。

以上の特徴を踏まえた日本と英国との今後の研究協力ですが、まず基本的には ①相互の理解増進が益々重要だと思われます。両国の研究者がお互いの研究内容や問題意識に関して「出会いを通じて」出来るだけ密に情報交換することが必要で、そのような機会創出の努力が重要でしょう。それに加えて ②研究の推進方法に関する意見交換も是非積極的に進めて欲しいと思います。また、③日英の卓越した研究の紹介も必要でしょう。JSPSがその仲介役を務めることも良いかと思います。さらに、④JSPSには日本で研究した方々の同窓会がありますが、同窓会員は言わば日本の研究のメッセンジャーですので、彼らの活躍で日本の研究のエッセンスを皆様に届けて欲しいと思います。

なお、これらのためにもJSPSが提供する各種のフェローシップや研究協力助成金を是非活用して頂きたいと思います。

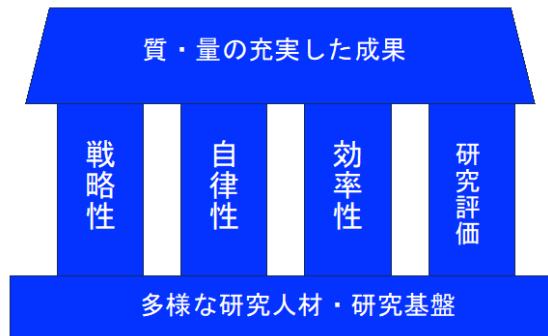


図2. 英国の大学の学術研究の特徴。

センター長の英国観望

3. 英国の科学者助言制度について

最近41人の研究者が世界68か国の71,922人に対して「科学者への信頼度」に関する大規模な国際比較をした調査結果の論文が発表されました[8]。これによると1～5段階の評価でG7の国の結果は、米国(3.86、12位)、英国(3.82、15位)、カナダ(3.81、17位)、ドイツ(3.49、44位)、フランス(3.43、51位)、イタリア(3.38、57位)、日本(3.37、59位)でした。英国では科学者への信頼度が高いことが分かりますが、これは科学者が政治・社会に大きな発言力を持つことと無縁ではないと考えられます。

実際に英国では科学者が政府に対して政策決定の助言を行う制度が整備されています。特に「科学的根拠に基づく政策(Evidence-Based Policy)」を推進するための多層的な助言システムがあるのが特徴です。その一部をご紹介します。

まず政府首席科学顧問(Government Chief Scientific Adviser, GCSA)があります。これは首相および内閣に対して科学技術に関する助言を行う重要な役職です[9]。次に各省庁には首席科学顧問(Chief Scientific Advisers, CSAs)が配置されていて、それぞれの分野で政策決定の科学的基盤を提供しています。またCSAはGCSAと連携し、政府全体の科学政策を調整します[10]。さらに各省庁には科学諮問委員会(Scientific Advisory Committees, SACs)という独立した委員会が、特定の問題に関する科学的助言を提供するために設置されています[11]。

政府文書によればGCSAは、科学的な知見を政府の重要な意思決定に確実に活かすため、次のような役割を担っています。すなわち「①首相や内閣に対して、必要に応じて科学的な助言を行う。この助言は状況に合った適切な内容で、優れていて実際の政策に役立つ形で提供される、②政府全体で科学的助言を取り入れる仕組みを整える。この仕組みは、効率的で効果的なものとし、科学的事実をきちんと伝えるものである。一度作った仕組みがその後も確実に継続されることが重要である[9]」。

なおGCSAの選出は推薦も含めた一般公募で行われますが、募集要件には「科学界・学術界・産業界における優れた実績」などが含まれます。選考委員会での選考を経て、最終的には首相が任命します[12]。またGCSAは政府科学局(Government Office for Science)の長も務めます。



図3. デイム・アンジェラ・マクリーン

直近4代のGCSAとその略歴は以下の通りです。

(1) デイム・アンジェラ・マクリーン(Dame Angela McLean):

2023年4月より現職、女性として初めてのGCSA。前職はオックスフォード大学教授で、数理生物学の専門家。

(2) サー・パトリック・バランス(Sir Patrick Vallance):

2018年から2023年まで在任。医師、臨床薬理学者。前職はGSK(グラクソ・スミスクライン)で研究開発部門の責任者。

(3) サー・クリス・ウィッティ(Sir Chris Whitty):

2017年から2018年まで暫定的にGCSA。医師であり、疫学者。

(4) サー・マーク・ウォルポート(Sir Mark Walport):

2013年から2017年まで在任。免疫学者であり、ウェルカム・トラストのディレクターを務めた後、GCSAに就任。

私たちは現在のGCSAのアンジェラ・マクリーン教授に、一昨年にロンドンの科学博物館で開かれた第12回日英科学技術委員会でお会いしました。同教授は会議冒頭に英国の科学技術の重点課題を説明されるとともに、会議をしっかり主導されていました。またGCSAとして「科学的根拠に基づく政策」を重視し、AI規制・気候政策・感染症予測などに具体的提言をし、数理モデルや科学文化の透明性を重視しているとお聞きしています。

また3代前のマーク・ウォルポート教授は現在王立協会の副会長です。私たちは2024年1月に同教授を訪ねてJSPSロンドンと王立協会の今後の連携を強めるための話し合いをしました。また同年9月には王立協会で開催された「JSPSロンドン創立記念有識者交流会」で冒頭にご挨拶を頂きました。ウォルポート教授のGCSAとしての功績は、科学的助言の強化と政策への科学技術の統合、科学技術イノベーションの推進、国際的な科学技術協力の推進などとされています。



図4. 王立協会にて。
右から3人目が
サー・マーク・ウォル
ポート(2024年1月)

英国のGCSAは上記のような科学政策に加えて、すべての政策に科学的視点を入れる責任も負います。全省庁にCSAのネットワークがあり、GCSAはそのトップとして全省庁を統括するなど強い権限を持っています。米国の科学顧問は大統領個人のアドバイザーという位置づけで、政権の意向に強く左右される傾向がありますが、英国GCSAはより強い立場と言えます。

センター長の英国観望

4. ヴァージニア・ウルフなんてこわくない？

ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882~1941) は20世紀の英国を代表する作家・評論家であり、特にモダニズム文学を代表する存在として、意識の流れ (Stream of Consciousness) と呼ばれる手法などで有名です。また彼女はフェミニズムや女性の知的自立にも大きな影響を与えたと言われています[13]。私は彼女の名前こそ知っていましたが、実はその小説を読んだのはロンドンに来てからになります。



ヴァージニア・ウルフ[13]

因みに私が子供の頃に「ヴァージニア・ウルフなんかこわくない」というエドワード・オールビーの戯曲が有名になりました[14]。そのため私は「ヴァージニア・ウルフはこわい人」だと思っていましたが、後にこれはディズニーのアニメ「三匹の子ぶた」の歌「狼なんかこわくない」の狼 (Big Bad Wolf) をヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) に置き換えた駄洒落と知って、拍子抜けをしたことがあります。

私は彼女の小説の中では、ある一日の出来事を主人公クリッサを含む登場人物たちの意識の流れを通じて描く「ダロウェイ夫人」と言う本が一番好きなのですが、その理由の一つはこの小説に私の住まいの近くのリージェンツ・パークやバッキンガム宮殿近くのセント・ジェームズ・パークなど馴染みのある場所が沢山出てきて、ちょうど100年前の様子が良く分かるからです。

1904年から彼女はロンドンのブルームズベリーに住み始めましたが、ここで著述家や芸術家の知的サークル「ブルームズベリー・グループ」の人たちと親交を深めました。その中には経済学で有名なジョン・メイナード・ケインズもいました。また彼女はその中の1人レナード・ウルフと1912年に結婚しました。



図5. ブルームズベリー地区周辺のヴァージニア・ウルフの住まい

- ① 1904~07年、ブルームズベリー・グループ集会所 ((46 Gordon Square),
- ② 1907~15年 (29 Fitzroy Square)、③ 1924~39年 (52 Tavistock Square),
- ④ 胸像のある場所 (Tavistock Square Gardens)、⑤ JSPSロンドン・センター

図5に彼女が活躍した付近の地図を示しますが、2人は②の29 Fitzroy Squareに住んだ後、一時郊外で暮らしていましたが、1924年からはブルームズベリーに戻り、現在はホテルになっている③の52 Tavistock Squareに晩年近くまで15年間住みました。彼女はここで先程の小説を含む代表作の多くを執筆しています。

地図で分かる通り、①、③、④のブルームズベリー地区は、我々のオフィス⑤から徒歩10分ほどの距離にあります。また④の Tavistock Square Gardens には彼女の胸像がありますし、住居やブルームズベリー・グループの集合場所などには青い銘板 (ブルー・プラーク) があります。この辺りを晴れた日に散歩すると、ヴァージニア・ウルフの小説を想い出し、「意識の流れ」の世界に浸ることが出来るので、それは中々楽しいことです。



図6. 左: 地図②の住まいと銘板、中: 地図④の胸像、右: 地図③の住まい (現在はホテル) と銘板。

参考文献

- [1] https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL_70.pdf
- [2] https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL_66.pdf
- [3] https://www.jsps.org/jsps_newsletter/files/JSPSNL_71.pdf
- [4] https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL_70.pdf#page=2
- [5] https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL_68.pdf
- [6] <https://2029.ref.ac.uk/publication/pce-pilot-exercise-guidance/>
- [7] <https://2029.ref.ac.uk/people-culture-and-environment-pce/pce-indicators-project/>
- [8] <https://www.nature.com/articles/s41562-024-02090-5>
- [9] <https://www.gov.uk/government/people/angela-mclean>
- [10] <https://www.gov.uk/government/groups/chief-scientific-advisers>
- [11] <https://www.gov.uk/government/publications/scientific-advisory-committees-code-of-practice/code-of-practice-for-scientific-advisory-committees-and-councils-copsac-2021>
- [12] <https://www.jst.go.jp/crds/pdf/2014/OR/CRDS-FY2014-OR-03.pdf>
- [13] https://en.wikipedia.org/wiki/Virginia_Woolf
- [14] https://en.wikipedia.org/wiki/Who%27s_Afriend_of_Virginia_Woolf%3F

AMS-JSPS Symposium

AMS-JSPS Symposium

表題：気候温暖化をめぐる公衆衛生システムについて日英専門家が政策課題を議論

JSPS ロンドンでは2024年10月16-17日、イギリス医学院と共催で、「気候温暖化における強靱な公衆衛生システムの構築」をテーマに政策ワークショップを開催した。

今回のワークショップでは、日英から長崎大学の春日文子教授とグラスゴー大学のVittal Katikireddi 教授が議長を務めるかたちで約半年にわたりアジェンダ設定や講演者の選定を行った。当日は、スコットランド政府首席医務官のSir Gregor Smith教授を含む多分野にわたる日英の専門家約40名が一同に会し、日本と英国の間で知識と経験を共有した。気候変動において特に最も脆弱な人々に焦点をあて両国のケーススタディやグループディスカッションを通じて政策と研究のギャップ、日英の経験と教訓を一日半にわたり議論し以下のような結論に至った。

- 日本と英国の国際協力の価値が強調され、両国は共通の解決策につながる独自の強みを持っている。災害対応、高齢化、環境の持続可能性に関する互いの経験から学ぶことで、両国は医療システムの回復力を高め、将来のショックに対してより適切に備えた、より公平で適応力のある医療インフラを構築することができる。

なお、今回のワークショップを終えてすでに日英研究者間でデータの共有やフォローアップ会合、個別の研究者交流が芽生えている。現在イギリス医学院とJSPSロンドンにて報告書を纏めており政策提言として日英関係者に広く共有することとなっている。

各論に関する議論の一部を以下に紹介する。

➤ 社会問題としてのレジリエンス(強靱さ)

医療および公衆衛生システムは従来の境界をはるかに超えて地域社会にまで広がるため、相互に関連したアプローチが必要である。社会的孤立が人々の心身の健康に及ぼす悪影響については、より良い社会的結束につながるコミュニティ全体のアプローチを採用することが重要であり、特に脅威の影響を不均衡に受け、そうでなければ社会的セーフティネットから脱落する可能性のある個人をより適切にサポートすることが求められるだろう。さらに、現在の資本主義社会構造がもたらす課題については、より包括的で再生可能な社会に移行することで、脅威に対する回復力向上も保証できるのではないかと。治療から離れて予防医療に移行することも、緊急時の医療システムへの負担を軽減する方法であるだろう。



長崎大学 春日文子教授



グラスゴー大学
Vittal Katikireddi 教授

- 日本と英国は異なる環境にありながら、協力と学習の余地は依然と存在することから互いの強みから学びあえる。
- 日本と英国で強靱な医療・公衆衛生システムを構築するには、協力、革新、包括性を促進しながら、短期的および長期的な課題に対処する多面的なアプローチが必要。
- 特に脆弱な人々の間での健康格差に対処すること、健康、社会的要因、環境の持続可能性の相互関連性を認識した政策を策定するための分野とセクター横断的な協力が重要。

➤ 健康格差の縮小

気候変動やパンデミックなどの現在および将来の脅威は不平等を拡大させる可能性がある。医療システムの強靱さを向上させるためのあらゆる取り組みは、日本と英国に残存する不平等にまずは対処する必要があるだろう。そこでは日英の脆弱な人口層（高度な医療サービスを受けられない人々やその理由）について理解を深め、これを理解するためのメカニズムとして、共有できるデータと強力な監視機能が重要である。患者や一般市民とともに強靱さを高めるための解決策を共同で設計することは、人間中心の回復力のある医療システムを構築するための重要な解決策として注目すべきである。これについては両国でさまざまな事例があるため、さらに知識とベストプラクティスを共有したい。



会場全体の様子

➤ サイロを越えた作業

従来の分野別セクター別のサイロな作業を超えて政府横断的な取り組みや学際的な研究へと移行すること、さらに研究を政策に反映させる機会を増やすことが重要。政府間の連携により、ヘルス危機に対応して政策を迅速に策定できるようになること、そして良好な健康と幸福の結果が非医学的要因によって決まることを認識し、すべての政策（住宅や建築環境なども含めて）に健康を含めることで、社会が事前に危機に備えることができると考えられる。政府を超えて、研究者、国民、公共部門と民間部門の連携により、より大きなイノベーションが実現し、人を中心としたシステムが生まれる可能性がある。学界と政策立案者との連携が深まれば、両国での研究の実践がより容易になるだろう。

➤ 複合的な圧力への管理

経済的なリスクを伴う時期に発生するパンデミックは、医療システムへの複合的な圧力の影響を管理が必要ではないか。私たちの医療システムが COVID-19 から完全に回復していない時期においては新しいベンチマークが必要ではないかという意見もあった。医療従事者だけでなく一般の人々のメンタルヘルスにも影響を与えている。英参加者は、日本は災害対策において先行しており、特に医療システムの訓練と準備の面で日本の経験から学べる機会が多いと指摘された。さらにコミュニティの災害軽減と対応に貢献するために看護師が果たす重要な役割を果たすだろう。

➤ 統合監視と分析

将来起こりうる脅威に対しては、迅速で証拠に基づいた対応が必要。この迅速な対応に役立てるために、さまざまなセクターにまたがる地球の健康と健康システムの監視と分析を統合することが重要。これは、関係する利害関係者が地球の健康と人々の健康の両方を理解するための、カリキュラム内外の教育とトレーニングだけでなく、堅牢なデータによって支えられることになるだろう。日本と英国の早期警報システムから学んだ教訓を共有することが重要。



分科会の様子



➤ 評価

証拠に基づく政策の策定を支援するために保健システムの回復力に対する介入を評価することの重要性についても議論。すでに実施されている介入の有効性を測定する際の証拠のギャップを埋めるべきである。プレゼンテーションでは、日本の熱中症警報システムが主な例として紹介され、医療システムの回復力を測定するために使用できる指標の例について議論、英国の「回復力のある医療システム」プロジェクトに取り組んでいる研究者は、主要な関係者と共同で回復力に焦点を当てた概念フレームワークを設計し、COVID-19に対応するイノベーションがどのように、そしてなぜ導入されたか説明した。

➤ 保健システムの環境への影響

医療システムは炭素集約型であり、環境に大きな影響を与えており、実際に日本と英国の排出量の約4~5%は医療によるものである。より回復力のある医療システムへの移行が環境への影響を減らす機会にもなるだろう。この影響を軽減するための取り組みは、英国と日本では医療制度の違いや関係者の認識の賛同の段階の違いにより異なることから、今後も継続して知識共有が重要である。

また、過剰治療は回復力のある医療制度の資源を浪費するだけでなく、環境にも悪影響を及ぼす。これを克服するための重要な解決策として医療従事者と患者/一般市民の両方の行動の変化があるだろう。

➤ イノベーションとテクノロジーの採用

イノベーションの導入、特に医療と社会福祉における人工知能（AI）の活用機会と課題について議論。AIは、医療システムを改善するための最大のチャンスの一つとして注目できる。たとえば、診断機能などを通じて一部のグループの治療を変革する機会や、AIが時間のかかるタスクを自動化して医療サービスへの負担を軽減する方法などである。一方でAIの使用に伴うリスクについては、AIが引き続き疎外されたグループに対して人種的偏見を示し、既存の健康格差を悪化させるリスクがある。

（JSPS London 副センター長 妙見由美子）



日英ワークショップ参加者による集合写真

Cover Story:

JSPS- Royal Society of Edinburgh (RSE) Event 3rd to 5th December 2024

Newsletter from JSPS London | No.78

JSPS- Royal Society of Edinburgh event

JSPS & RSE Mark Anniversaries with Art, Science, and Culture: A Deep Dive into UK-Japan Collaboration

As part of the events taking place in FY2024 to mark the 30th Anniversary of JSPS London and 20th Anniversary of the JSPS Alumni Association for the UK and Ireland, a regional event was held in Scotland. This event took place in three parts over three days from 3rd to 5th December 2024 in Edinburgh and was co organised with the RSE and Regional Manager of Scotland of the JSPS Alumni Association for the UK and Ireland, Dr Miranda Anderson.



Moderator of the panel discussion, Dr Miranda Anderson



Creation of the cellular drawings led by artist Dr Goro Murayama, University of Tokyo

On 4th December the symposium entitled Fission-Fusion Perspectives and Complex Issues was held at the RSE. The purpose of the symposium was to bring into academic discussions the insights of people from across society, including curators and artists of various kinds, by inviting them to draw on and deploy their artistic capacities and enable verbal and other creative forms of response to the complex challenges humans face in the world.

For the first part of the event on 3rd December a collaborative fission-fusion art activity was held in preparation for the symposium on 4th December and the celebratory event on 5th of December. This involved the creation of cellular drawings led by artist Dr Goro Murayama from the University of Tokyo and a creation of symbols to represent past, present and future in cellular drawings from 12 of the symposium participants including the speakers from Japan. This event was held at the Edinburgh Futures Institute, a new interdisciplinary institute at the University of Edinburgh, to help bring the ideas and the Scottish-Japanese connection to a wider audience. This artwork creation was filmed using time lapse so it was possible to see the emergence of the drawing. The resultant artwork will be displayed and serve as a commemoration of the collaboration.

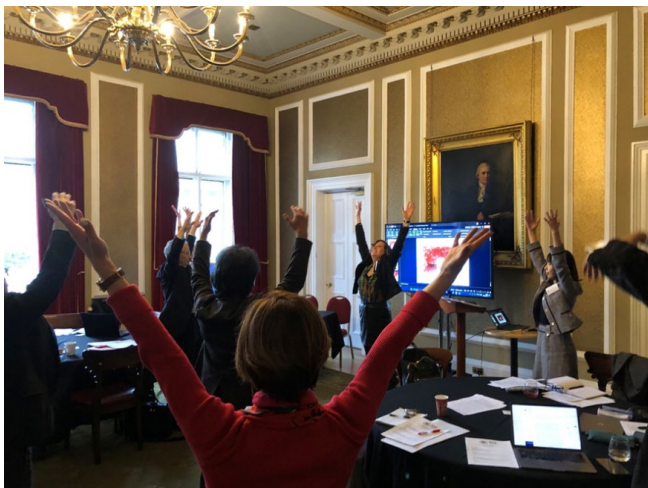
The event started with an introduction from Professor Naoto Kobayashi, Director of JSPS London and Dr Miranda Anderson. This symposium gave participants the opportunity to explore distinctions between Japanese and Scottish understandings of culture and artefacts as fundamental aspects of the human capacity to evolve and reflect on each other's perspective. Some of the presentations on these areas were from Professor Masahiko Hara, Institute of Science Tokyo, who explained about his work on art installations as new experimental systems that exemplify the embodiment of non-conventional modes of interaction and co-existence with AI and machines. Professor Takuo Dome from Osaka University re-examined the framework of modern society and explored the meaning of "inochi" and the vision of

inochi in need of assistance surrounded by inochi giving assistance. Also, Professor Shannon Vallor, Edinburgh Futures Institute, discussed the ethics of emerging technologies and humanity in the age of machine learning and thinking.



Presentation from Professor Takuo Dome, Osaka University

The symposium also included a short meditative, storytelling and poetry session led by Ms Jennifer Williams, Edinburgh Futures Institute, and music and movement activities led by Ms Natasha Gillmore, Barrowland Ballet. These activities helped us to understand the nature and value of engaging with other people through embodied, creative, non-verbal and contemplative means as well as the importance of us paying attention to our embodiment, reflective and creative capacities.



The meditative session led by Ms Jennifer Williams, Edinburgh Futures Institute

Towards the end of the event, participants were asked through roundtable discussion to consider how we can create educational systems, technologies, cultures and societies that have more awareness and can encourage interconnectedness to each other and the world, and in doing so also enable enriched reflective and individual perspectives to flourish. Through drawing on research across disciplines and exploring critical, contemplative, and creative practices, participants could map out important areas for collaboratively developing teaching and research that can help us tackle global issues and recalibrate our way of being in the world. This symposium highlighted the importance of interdisciplinary discussion to explore relationships and gaps between different forms of knowledge and consider ways that art can inform technology and understanding of culture and artefacts as fundamental aspects of the human capacity to evolve.

The final reflections and closing discussion of the symposium also turned to the four provocations that participants were asked to consider in advance and these focussed on current crises and modes of relating to each other and the world around us. The four provocations were:

1. What do you view as the most important theoretical, educational or other trends in your field and in society? How do these relate to understandings of human nature and/or complex issues in the world?
2. How do the arts and culture shape, reflect and interrogate ideas about a. being human in the world and b. the roles of technologies and AI (as well as vice versa)?
3. How can we transform modes of engagement a. with each other and b. with complex issues? For instance, how can we create more awareness and scope for inclusion of non-conventional modes of interaction and engagement that move us beyond habitual routines and practices?
4. Having thought through these questions, do you have a further provocation or even just a reflection that you would like to offer?

In answering, respondents were asked to focus on global factors, on factors that are specific to Scottish or Japanese society and culture, and/or on similarities and differences between these two countries, and/or in relation to their particular background and position in society. These responses stimulated discussions on what makes elements distinct to a nation or a person, and how the identity of each extends across space and evolves over time, composed out of and interfusing with aspects of others and of life in the world. It was also an opportunity to reflect on what we can learn from each other's perspectives.

The final day of the event was also held at the RSE and was a hybrid celebration of the working relationship between JSPS and RSE. It was an opportunity to develop Japan-Scotland relations, reflecting on histories, considering the present and reorienting the future of our cultures, society and world. The event started with remarks from Professor Mona Siddiqui, RSE Vice-President, International, and then an introduction to the history of Japan-Scotland interaction including the history of JSPS and joint projects JSPS has supported with Scottish Universities, given by Professor Naoto Kobayashi. Further remarks were made by other dignitaries including Mr Tadashi Fujiwara, Consul General, Consulate-General of Japan in Edinburgh and Mr Angus Roberston, Cabinet Secretary for the Constitution, External Affairs and Culture. Following this Professor Kobayashi and Professor Siddiqui signed a cooperation agreement between JSPS and RSE as a joint commitment to strengthening research partnerships between Japan and Scotland for the future.



Remarks at the celebratory event from Mr Tadashi Fujiwara, Consul General, Consulate-General of Japan in Edinburgh



Remarks at the celebratory event from Mr Angus Roberston, Cabinet Secretary for the Constitution, External Affairs and Culture



Remarks at the celebratory event from Professor Kobayashi Sho Cho, Director, JSPS London

The sessions after this included presentations from Dr Yumiko Myoken, Deputy Director of JSPS London and Mr Alan Solanika, RSE International Relations and Awards Manager, who gave an overview of mission, activities and funding opportunities of their respective organisations. Academic presentations were given by Professor Osamu Sakura, University of Tokyo on comparing Asian and Western attitudes to technology and artworks and Professor Masahiro Hara spoke on his science-art installation experiment. The final session of presentations looked at Japanese artefacts in the National Museum of Scotland from curator Dr Louise Boyd and Japanese art and influence in artworks housed at the Scottish National Galleries from curator Dr Freya Spoor. During the break that followed, a name card lanyard exchange networking activity took place to encourage further interactions between participants.

At the end of the event there was a follow up roundtable discussion moderated by Dr Miranda Anderson to discuss the diverse responses to the four provocations based on the themes of the symposium that took place the day before around 'Fission-Fusion Perspectives to Complex Issues.' Pannellists were made up of invited speakers and members of the audience, including JSPS Alumni and JBUK members as well as representatives from Scottish and Japanese academia, culture and society, and they could discuss different perspectives together and all gain expanded and deepened understandings of the issues. These

responses have been formulated into a final JSPS-RSE Joint Report now under review. This report includes an introduction, the individual responses and the symposium's contribution to thinking on these issues. The event was brought to a close with remarks from Professor Graham Caie, JSPS Alumnus and previous Vice President of RSE. He congratulated JSPS and RSE on holding a successful symposium and celebratory event and looked forward to further strengthening Japan-Scotland relations.

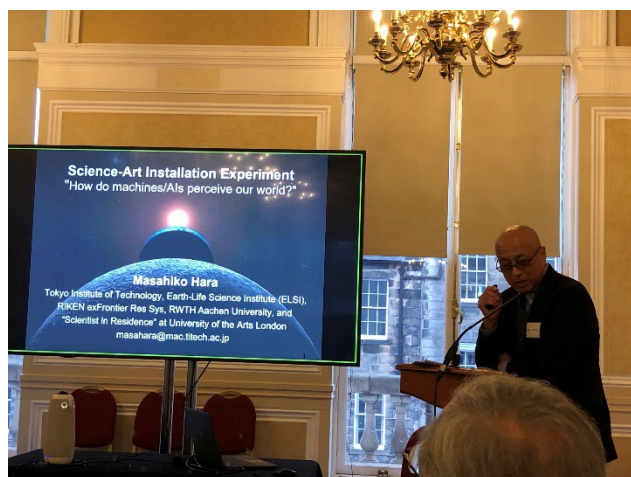
(JSPS International Programme Coordinator, Polly Waton)



The cooperation agreement signed by JSPS and RSE



Presentation from Professor Osamu Sakura, University of Tokyo



Presentation from Professor Masahiko Hara, Institute of Science Tokyo



Panel discussion at the celebratory event

ロンドン研究連絡センター 創立30周年の軌跡(II)

[1] JSPS英国・アイルランド同窓会の活動

(1). 概要

2024年にJSPS英国・アイルランド共和国同窓会（JSPS UK and ROI Alumni Association、以下同窓会）は創立20周年を迎えました。そして同年9月4日（水）にオックスフォードのアシュモレアン博物館でロンドン研究連絡センター創立30周年記念式典と同時に記念式典を行いました。

JSPS英国同窓会は、JSPSフェローシッププログラムの資金援助を受けて日本で在外研究を行い英国に戻った研究者（元フェロー）によって2003年に設立されました。そして2004年6月4日（金）に王立協会（The Royal Society）講堂において第1回同窓会総会が開催されました。また2014年にアイルランド共和国に拠点を置く元JSPSフェローの加入がJSPS東京本部により承認され、その後協会の名称がJSP英国・アイルランド共和国同窓会に変更されました[1]。

この同窓会は継続的に規模を拡大していて2024年9月現在915名を超える会員が活動しています。同窓会は執行委員会(Executive Committee)と地域マネージャー(Regional Manager)の協力の下、以下の目標のために英国およびアイルランド共和国で活動を行っています。すなわち (1)日本との学術的つながりの構築および維持、(2)新しいフェローへの指針提供、英国で活動する日本人研究者の支援、(3)学術機関や関係機関との共同活動、(4)同窓生間での情報交換、(5)地域グループと日本とのつながりの強化、などです。特に今まで毎年2回行われている出発前セミナー(Pre-departure Seminar)は、新しいフェローが日本での研究経験に備えるためのものです。また同窓会のタベ(Alumni Fellowship Evening)は、会員がカジュアルでリラックスした雰囲気の中でネットワークを築くためのものです。さらに同窓会員はBridgeフェローシップ(2009年創設)により、日本の研究者との研究協力を維持、強化するため日本への再渡航の機会を利用することが出来ます。



(2-1) 歴代会長・副会長 (Chair and Co-Chair)

役職	氏名	タイトル	所属	任期
創代会長	Peter Sammonds	教授	Department of Earth Sciences, University College London	2004- 2006
副会長	Martyn Kingsbury	教授	Department of Education, Imperial College London	2004- 2006
会長	Martyn Kingsbury	教授	Department of Education, Imperial College London	2006- 2014
副会長	Hugo Dobson	教授	National Institute of Japanese Studies, University of Sheffield	2006- 2010
副会長	Ruth Goodridge	教授	Faculty of Engineering, University of Nottingham	2010- 2014
会長	Ruth Goodridge	教授	Faculty of Engineering, University of Nottingham	2014- 2017
副会長	John Fossey	教授	Department of Chemistry,	2014- 2017
会長	John Fossey	教授	Department of Chemistry, University of Birmingham	2017- 2022
副会長	Andrew Quantock	教授	School of Optometry and Vision Sciences, Cardiff University	2017- 2022

**(2-2) 現在の執行委員と地域マネジャー
(Executive Committee Members and Regional Managers)**

役職	氏名	タイトル	所属	任期
会長	Andrew Quantock	教授	School of Optometry and Vision Sciences, Cardiff University	2022-
副会長	Alessandra Devoto	教授	School of Biological Sciences, Royal Holloway, University of London	2022-
執行委員	John Brazier	博士	School of Pharmacy, University of Reading	2014-
執行委員	Chris Pearson	博士	STFC Rutherford Appleton Laboratory	2014-
執行委員	Erica Baffelli	教授	School of Arts, Languages and Cultures, University of Manchester	2023-
執行委員	Ekaterina Hertog	教授	Department of Sociology, University of Oxford	2023-

地域マネジャー(Regional Managers)

地域	氏名	タイトル	所属	任期
ウェールズ	Keith Shore	教授	School of Electronic Engineering, Bangor University	2019-
スコットランド	Miranda Anderson	博士	School of History, Classics and Archaeology, University of Edinburgh	2017-
北アイルランド	Davide Mariotti	教授	School of Engineering, Ulster University	2009- 2024
アイルランド	Emma Sokell	教授	School of Physics, University College Dublin	2009-

(3)活動の歴史

1.JSPS同窓会設立総会開催(2004年6月)

2004年6月4日(金)に王立協会(The Royal Society)講堂において第1回同窓会総会が開催されました。本総会には外国人特別研究員同窓生を中心に英国在住の海外特別研究員からも多くの参加がありました。冒頭、金口恭久センター長より同窓会設立に係る経緯に関する説明があり、大多数の会員の支持により会長以下4名の同窓会役員が選出された旨の報告がありました。その後、新会長のPeter Sammonds教授に司会が引き継がれ、同窓会役員および全参加者からの挨拶や発表がありました[2]。



図1

左上: Peter Sammonds教授の挨拶、
左下: JSPSフェローの体験談紹介、
右上: 王立協会前での集合写真。

2. Pre-departure Meetingの開催(2005年5月)

Pre-departure Meetingがサマー・プログラム参加者を対象に2005年5月20日(金)にJSPSロンドンオフィスとBritish Council Japanの共催で、British Council UKで開催されました。これは参加者が当プログラムの理解を深め、英国に帰国後も日英交流を継続的に活発に行うための足がかりとするために始められたものです[3]。



図2. 左: プログラムの概要説明、 右: 参加者の懇親の様子

3. JSPS同窓会の夕べの開催(2005年5月)

第1回目の同窓会の夕べ(Alumni Fellowship Evening)が2005年5月20日(金)にロンドンのGarelie Bessonで開催されました。これはJSPSのプログラムに参加した研究者や日本に関心を寄せる研究者等が、日英の研究に関する情報交換を行うとともに、英国において日英の研究者コミュニティを広げるものです。当日はSammonds会長の挨拶の後、Kingsbury副会長の日本での経験談などが披露されました[3]。



図3. 左: Sammonds会長挨拶、 右: 参加者の懇親の様子

4. エディンバラで同窓会イベント“Evening Lecture”を開催(2006年3月)

スコットランドの地域同窓会も活発で、2006年3月1日(水)にはエディンバラ市内の The Scotch Whisky Heritage Centreにおいて、同窓会イベント “Evening Lecture & Debate” が開催され、“The Green Revolution in Africa”と題した講演が行われました。講演終了後は会食が行われ、同窓会会員、エディンバラ近郊の研究者、学生など30名を越える参加者の活発な意見交換が行われました[4]



図4. 左: 講演を熱心に聞く参加者、 右: パネル討論の様子

5. FURUSATO Awardの創設(2008年2月)

同窓会員に対するサポート・スキーム”FURUSATO Award”を新たに立ち上げ、2008年2月と11月に2回の募集を行い、7名が受賞となりました。このスキームの目的はJSPSフェローシップによる日英の研究リンクの保持・発展への寄与で、同窓会の受賞者へは学術活動経費(日本への渡航費等)が授与されました[5,6]。



図5. FURUSATO Award授与式(授与者、古川佑子センター長)(2009年12月4日)[6]。

6. Bridgeフェローシップの創設(2009年11月)

JSPS本部は、2009年11月に各国のJSPS同窓会員に限定した支援制度”Bridgeフェローシップ”を創設しました[7]。これはJSPSの事業を通じて日本での研究を経験した研究者に日本「再訪問」の機会を与えるものです。JSPSロンドンのFURUSATO Awardとは年間募集回数、支援費用、日数などに違いがありました[8]。なおFURUSATO Awardは2014年度には募集を停止し、Bridgeフェローシップに一本化しました。

7. シンポジウム・スキームの開始(2010年10月)

2010年10月8日(金)に、日英シンポジウム開催スキーム2011年度開催分の募集を開始しました。当スキームはJSPS ロンドンが2009年6月に新規事業として立ち上げたもので、在英日本人研究者会および英国JSPS 同窓会 の研究者が主催する日英共同シンポジウムに対して、日本からの講演者旅費、シンポジウム開催費などの助成を行うものです。また同年10月20日(水)には、JSPS ロンドンにおいてこのスキームの受賞者を含むPre-departure Seminarを開催しました[9]。



図6. 左:Pre-departure Seminar参加者、右：各賞の授与式(授与者、平松幸三センター長)。

8. グラスゴーでの地域同窓会開催(2012年6月)

JSPS創立80周年行事の一環として2012年6月20日(水)にグラスゴーのStravaigin restaurantで同窓会員および在英日本人研究者が参加して懇親イベントが実施されました。これは同窓会スコットランド支部のマネージャーDr James Fountaineの企画によるもので、JSPSのプロモーション活動や日英研究者のネット ワーク構築について熱心な意見交換が行われました[10]



図7. 懇親会の様子。

9. JSPS 同窓会創立10周年記念行事を開催(2014年11月)

2014年11月24日(月)午後ロンドンの自然史博物館においてJSPSロンドン創立20周年記念式典およびJSPS同窓会創立10周年記念行事が開催されました。またその日の午前中には、同じ会場でPre-departureセミナーが行われました。記念行事では、主催者・来賓の挨拶や関連する講演の後、Bridgeフェローシップ、シンポジウム・スキームで顕著な成果をあげた同窓会員に同窓会賞が贈られました[11]。



図8. 左: 記念行事およびPre-departure参加者、
中上・右上: 各賞授与式(授与者は竹安邦夫センター長)。

10. 日英研究促進会議(2016年11月)

2016年11月16日(水)に在英日本大使館の協力の下「日英研究促進会議2016」を開催しました。これはJSPS同窓会と在英日本人研究者ネットワーク(JBUK)のメンバーを対象とした会議で、日英共同研究の新しいアイデアを生み出し、共同研究パートナーを見つける支援を目的として行われました。会議には同窓会とJBUKのメンバーなど121名が参加し、人文・社会系、理工系、生物・医学系の3分野で予め選ばれた各20人、計60人の方が研究発表を行いました。その後参加者全員の投票で選ばれた6人がCross Disciplinary Sessionで研究発表を行い、大変盛り上がりしました。これらの議論を踏まえて、具体的な共同研究に繋がる例が幾つも出て、この新しい企画は成功裏に終わりました。[12]。



図9. 左: 全体の会議の様子、中: 上野信雄センター長、右: 熱心に講演を聞く参加者。

11. John S Fossey前同窓会長記念シンポジウム開催(2023年3月)

2022年4月に40代半ばの若さで急逝されたJSPS同窓会前会長John S Fossey教授(バーミンガム大学化学科)を記念するシンポジウムが2023年3月29日(水)・30日(木)にバーミンガム大学で開催され、Fossey教授と親交のあった東京大学の小林修教授を始め世界中からの著名な研究者が、同教授を偲び研究発表を行いました。またJSPSロンドンを代表して小林直人センター長が追悼と感謝の辞を述べました[13]。



図10. 左: John S Fossey教授(2019年4月)、中: 参加者、右: 小林直人センター長。

12. JSPS同窓会創立20周年記念行事を開催(2024年9月)

2024年9月4日(水)午後にはオックスフォードのアシュモLEAN博物館においてJSPSロンドン創立30周年記念式典およびJSPS同窓会創立20周年記念行事が開催され約100人の方々の参加がありました。またその日の午前中には、同会場でPre-departureセミナーが行われました。記念行事では、主催者・来賓の挨拶や同窓会員による研究講演、登壇者によるパネル討論の後、Bridgeフェローシップ、シンポジウム・スキーム等で顕著な成果をあげた同窓会員に同窓会賞が贈られました[14]。

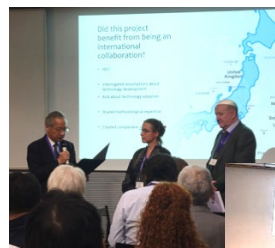


図11. 左: 全体の参加者、右: 同窓会受賞者の方々。

[2] 在英日本人研究者会(JBUK)の活動

(1)概要

在英日本人研究者会(JBUK: Japanese Researchers Based in the UK)は2006年に始まった「在英日本人研究者の緩やかなネットワーク」を目指した会合が母体なったもので、2024年9月現在で約526人の会員がいます。会員は英国の大学や研究所で研究しているPhDの学生やポスドク、サバティカル制度等で一時滞在中の研究者、大学の講師から教授まで、様々なキャリアの多様な専門分野の日本人研究者です。会員の特典としては、①JSPSロンドンからのイベント情報等の案内、②情報開示に同意した場合、他会員の情報を閲覧し連絡を取ることが出来る、③会員限定のイベントへの招待、④メンバーを対象とした助成プログラム等があります[15]。

(2)開催の歴史[16]

回数	日時	場所	主題等
第1回	2006年 2月17日(金)	Stratton Room, Holiday inn London Mayfair	研究者の創造性を高める研究環境づくりの促進、評価システム等
第2回	2007年 3月2日(金)	Stratton Room, Holiday inn London Mayfair	日英の研究環境の違い、研究者のキャリアパス、日英の奨学金等
第3回	2008年 2月22日(金)	JSPS London	科学技術・学術における英国の世界での位置付け等
第4回	2008年 11月28日(金)	JSPS London	英国大学の戦略的な選択・集中、研究大学群としての厚み等
第5回	2009年 11月20日(金)	JSPS London	日英の研究環境比較を踏まえた日本の学術研究環境のあるべき
第6回	2011年 2月11日(金)	JSPS London	講演会 “Curating art with science in mind”
第7回	2012年 2月24日(金)	JSPS London	プロモーション・セッションと講演
第8回	2013 1月28日(月)	JSPS London	プロモーション・セッションと講演
第9回	2014年 1月30日(木)	JSPS London	プロモーション・セッションと講演
第10回	2015年 1月27日(金)	JSPS London	プロモーション・セッションと講演
第11回	2016年 2月3日(水)	Daiwa Foundation Japan House	JBUKのこれまでとこれから大学PIとして問題意識の共有
第12回	2017年 2月22日(水)	JSPS London	第1回英国サバイバルセミナー
第13回	2018年 6月26日(火)	JSPS London	第2回英国サバイバルセミナー
第14回	2019年 6月20日(木)	JSPS London	第3回英国サバイバルセミナー
第15回	2022年 7月6日(水)	JSPS London	第4回英国サバイバルセミナー
第16回	2023年 7月4日(火)	JSPS London	第5回英国サバイバルセミナー
第17回	2024年 7月4日(木)	JSPS London	第6回英国サバイバルセミナー

(3) 会議の内容



図12. 第1回在英日本人研究者会

第1期(第1回(2006年)～第5回(2009年))

この期間は主に在英のPI(独立研究者)の方々に参加頂き、イギリスの研究活動や環境等をもとに、日本(文科省等)へ助言・提言を行うことが目指されました。

第1回会議は2006年2月17日にロンドンにおいて、“Conference for Bridging Japan and the UK”(日本学術振興会ロンドン研究連絡センター主催「在英日本人研究者会議」)として開催され、16名の研究者が参加しました。主題は ①研究者の創造性を高める研究環境づくり、②評価システム、③学部生等が短期間海外で研究する機会を提供する制度、④研究費等の使用可能期間の弾力化、長期化、⑤学生、若手研究者を対象とする賞の創設、⑥研究環境の向上(経費の向上、技官の雇用)、⑦日本への帰国後の受け皿、などでした[17]。

第2、第3回会議では、①日英の研究環境の違い、②研究者のキャリアパス、③英国若手研究者の日本での研究促進方策、④海外在住日本人研究者の帰国支援、④科学技術・学術における英国の世界での位置付け、⑤学生・若手研究者の育成・支援、⑥日系企業との連携等、⑦人材の流動性について、などが議論されました[18,19]。

また第4、第5回会議での主題は以下のようなものでした。①大学の戦略的な選択・集中、②研究大学群としての厚み、③国際交流の意義と方策、④若手人材の育成、⑤将来の日本の研究環境等について、⑥講演会・ネットワーキング・レセプションについて、⑦今後の在英日本人研究者会議について、など [20,21]。

第2期(第6回(2010年)～第11回(2016年))

この時期に開催された第6回目(在英日本人研究者会)からは講演会を主体として開催し、広く英国在住の日本人研究者に参加が呼びかけられました。特に第7回～第10回には毎回50名程度の参加者がありました。内容は各種の活動報告(プロモーション・セッション)と特別講演会を組み合わせたものでした。特に活動報告は日英の大学、英国の学協会、在英国日本国大使館、JST等から行われ、また講演会では、下記の講師の方々に講演をお願いしました。また第11回会議ではそれまでの成果を確認し、改めて在英日本人研究者(特にPI)が日英学術交流の柱になるための方策について検討して行く重要性を確認しました[16]。



図13. 第7回在英日本人研究者会の様子。

JBUK

Japanese Researcher's
Network Based in the UK

第11回在英日本人研究者会(JBUK)において多数決によって決まった会議のロゴ

特別講演会の内容と講師

回数	講師名	タイトル・所属	講演題目
第7回	Dr Lucia Dolce	Reader, SOAS University of London	"Extravaganza, Asceticism, and the Power of Ritual: The Buddhist Liturgy of Water and Fire at Tōdaiji"
第8回	Prof Timon Screech	Professor, SOAS University of London	"1613-2013 Four Hundredth Anniversary of Japan-British Relations"
第9回	Prof Simon Kaner	Director, Centre for Japanese Studies, University of East Anglia	"Introducing Jomon dogu to their European Neolithic cousins"
第10回	Dr Alessio Patalano	Reader, King's College London	"The meaning of mobilising a defence force for disaster relief"

第3期(第12回(2017年)～第17回(2024年))

2017年の第12回から現在まで、在英日本人研究者会は「英国サバイバルセミナー」と銘打って、研究者として英国で研究費やポジションを獲得し、独立研究者(PI)として生き残っていく方策などを中心課題として議論をしました。また世界の他の国とは異なる英国の魅力や今後の日英研究協力のあり方などのについても議論が行われました。会議では通常、特別講演やパネル討論が行われ、そこにおいて参加者からの種々の疑問やコメントについて回答や議論が行われました。毎回50名以上の日本人研究者の参加があり、懇親会も含めて熱い議論が続きました。途中2年間はコロナ禍のために中断しましたが、2023年に再開して現在まで続いています。講演者・パネリストとして参加頂いた方々は下記の表の通りです[16]。

■ □ ■ 国際学術交流研修 ■ □ ■

独立行政法人日本学術振興会(JSPS)では、大学等の職員を対象として、国際交流に関する幅広い見識と高度な実務能力を有する専門的な職員の養成を目的とした国際学術交流研修を行っています。受講者は「国際協力員」として、以下のとおり、2年間の研修を受講します。

- JSPS東京本部における国際学術交流の実務研修(1年間)
- JSPS海外研究連絡センターにおける海外実務研修(1年間)

ご興味のある方は是非ご覧ください。<https://www.jsps.go.jp/j-overseas/kenshu.html>



第1回から6回までの英国サバイバルセミナーの講師及びパネリストたち

回数	講師(*)・パネリスト	所属
第1回 (2017年)	保明 綾*	School of Arts, Languages and Cultures, University of Manchester
	富山 哲男*	Life Cycle Engineering, Cranfield University
	永瀬 秀明*	Kennedy Institute of Rheumatology, University of Oxford
第2回 (2018年)	篠沢 義勝	School of Oriental and African Studies, University of London
	鈴木 憲	Queen Mary University of London
	田中 玲子	Imperial College London
	廣畑 貴文	Department of Electronic Engineering, University of York
第3回 (2019年)	山村 将博*	科学技術振興機構 研究開発戦略センター
	小川 浩司*	在英日本国大使館
	伊藤 義文	Cell Migration Group, University of Oxford
	小黑-安藤 麻美	College of Medicine and Health, University of Exeter
	小舘 尚文	Social Policy, University College Dublin
第4回 (2022年)	高田 正雄*	Faculty of Medicine, Imperial College London
	井上 勝晶	Diamond Light Source
	長瀬 洋子	Oxford Brookes Business School, Oxford Brookes University
	山野 博之	Cancer Institute, University College London
第5回 (2023年)	廣畑 貴文*	Department of Electronic Engineering, University of York
	多田 正純	Developmental and Cellular Biology, University College London
	富澤 ケイ 愛理子	Japanese Language and Culture, University of East Anglia
	鳥井 亮	Biomechanics, University College London
第6回 (2024年)	上田 泰己*	東京大学、University of Oxford
	高橋 功*	在英日本国大使館
	飯田 史也	University of Cambridge
	石原 純	Imperial College London
	梅村 真希	Cardiff University

また「英国でのキャリア形成で注意すべきこと」、「英国で研究を続ける上で必要な能力・心構え」、「グラントやフェローシップ獲得」、「共同研究相手を見つけ信頼関係を築く方法」、「英国で研究を続けるメリット・デメリット」、「日本の研究者が持っている強み」、「海外生活で生じる諸問題(家族関係など)」など、非常に多彩な課題が毎回議論されました。参加者の関心も非常に高く、パネリストとの質疑応答も大きな参考になりました。今後もこのセミナーは継続が予定されています。



図14. 第3回(左、2019年)および第6回(右、2024年)の英国サバイバルセミナーの参加者。

[3] 特別行事

1. JSPSロンドン・センター創立10周年記念式典を開催(2004年6月)

JSPSロンドン・センターの創立10周年を祝う記念式典が2004年6月4日(金)に王立協会で開催されました。小野元之JSPS理事長の式辞、工学物理学研究会議会長Dame Julia Higgins教授の祝辞の後、遠山敦子前文部科学大臣から「知の世紀に向けた日本の高等教育改革」という講演がありました。夕食会では小野理事長、自然環境研究会議会長John Lawton教授及び折田駐英大使からご挨拶がありました [22]。



図15. 小野理事長(左)、と遠山前文部大臣(右)

2. 慶應義塾大学ロンドン・オフィス開設(2006年11月)

慶應義塾大学ロンドンオフィスが、JSPSロンドン・センター内に開設され、2006年11月16日(木)に、ロンドン市内でお披露目式が行われました。JSPSは大学の海外での国際交流活動を支援していて、海外研究連絡センターにおいて事務所を大学と共同利用することを可能にしています。この慶應義塾大学ロンドン・オフィスの開設はその第一号となりました[23]。



図16.慶應義塾大学坂本理事のご挨拶。

3. JSPSロンドン・センター移転記念講演会「日英大学の将来」(2008年3月)

JSPSロンドン・センターは2007年10月にメイフェアからユーストンへ移転をしましたが、これを記念して2008年3月10日(月)にロンドン・オフィス移転開所記念講演会が「日英大学の将来」と題して行われました。当日は、古川佑子センター長が司会を務め、JSPS本部の村田直樹理事の挨拶の後、大学評価・学位授与機構木村孟機構長およびUCL(University College London)の学長Malcolm Grant教授の講演が行われました。参加者は100名近くに上りました[24]。



図16. 木村機構長(左)、Grant学長(右)のご挨拶。

4. 王立協会創立350周年記念式典(20010年6月)

2010年6月23日(水)に王立協会創立350周年記念式典が招待者約2,000人の参加の下、テムズ川沿いのロイヤル・フェスティバル・ホールで開催されました。式典には小野元之理事長が招待を受け、平松センター長も出席しました。同協会は1660年に国王の勅旨により設立されたもので、現存している世界最古の学会です。式典は王立協会長マーティン・リース伯爵の開会挨拶で始まり、王室からエリザベス女王、エジンバラ公爵、ウィリアム王子などの参列がありました[25]。



図17. (左から)王立協会フェローのC.N. Rao教授、小野理事長、平松センター長。



図18. 前列左から2人目 平松センター長、3人安西理事長、4人目 林駐英大使、後列左端 Martyn Poliakoff教授。

5. JSPS創立80周年記念行事を開催(2012年11月)

2012年11月14日(水)にJSPS創立80周年を記念して在英日本国大使館で「レジリエンス」をテーマにした記念行事が開催されました。当日は安西祐一郎理事長の式辞、林景一駐英大使や王立協会副会長Martyn Poliakoff教授による祝辞、6人の来賓による講演、鏡開き、フォトコンテストの授賞式などがありました。本会は200名近くの参加者により大いに盛り上がりました [26]。

6. JSPSロンドン・センター創立20周年記念式典を開催(2014年11月)

2014年11月24日(月)にロンドンの自然史博物館においてJSPSロンドン創立20周年記念式典が開催されました。当日はJSPS同窓会創立10周年記念行事も同時に行われました。40名近くの参加者の中、記念行事では、自然史博物館のRichard Herrington教授による開会挨拶があり、その後竹安センター長による活動成果や今後の抱負に関する講演がありました。また式後には自然史博物館の好意により貴重な特別収蔵標本の案内ツアーが行われました [11]。



図19. Richard Herrington教授。

■ □ ■ UK HE Information ■ □ ■

JSPS London では英国の学術・教育・研究に関わる情報をまとめて毎月発信しています。その中では、大学ランキング情報や、英国政府の発表する学術研究分野への政策、その影響等についても情報提供しております。

ご興味のある方は是非ご覧ください。https://www.jsps.org/uk_academic_information/

7. 日本スポーツ振興センター10周年記念シンポジウムを共催(2019年10月)

独立行政法人日本スポーツ振興センター(JSC)は、JSPSロンドンおよび在英国日本国大使館との共催の下、2019年10月15日(火)にロンドン事務所設立10周年記念シンポジウムを開催しました [27]。JSCは日本のスポーツ振興と学校安全の推進を目的とした組織ですが、ロンドン事務所設立直前の2019年の3～6月にはJSPSロンドン・オフィスの中に仮事務所(当時はNAASHという英語略称)が置かれていました [28]。このシンポジウムでは、様々な形式の‘Relationships’をキーワードに、各スポーツ分野のトップクラスの方々からそれぞれの先進事例が発表されました。



図21. 左:シンポジウム関係者(左から2番目が上野信雄センター長)[27]、
右:事務所設立の打ち合わせ(右から2番目が古川佑子センター長)[28]。

8. JSPSロンドン・センター創立30周年記念式典を開催(2024年9月・12月)

2024年9月4日(水)にオックスフォードのアシュモLEAN博物館において創立30周年記念式典が開催され、約100人の方が参加されました[14]。当日は水本哲弥JSPS理事の式辞、王立協会のAlison Noble副会長、川上恭一郎在英日本国大使館公使の祝辞の後、講演やパネル討論が行われました。また同年12月5日(木)には王立エディンバラ協会において約40人の参加者の下で記念行事が行われ、藤原直在エディンバラ日本国総領事、Angus Roberston文化大臣の祝辞がありました。また同協会副会長Mona Siddiqui教授と小林直人センター長の間でLetter of Intentionが交わされました。



図21. 王立エディンバラ協会での集合写真。

【参考文献】

- [1] https://www.jsps.org/alumni_about/
- [2] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No1.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No1.pdf)
- [3] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No5.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No5.pdf)
- [4] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No8.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No8.pdf)
- [5] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No19.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No19.pdf)
- [6] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No23.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No23.pdf)
- [7] https://www.jsps.go.jp/file/storage/general/english/e-quart/quarterly_pdf/jsps_quarterly29.pdf
- [8] https://jsps.blogat.jp/alumni/furusato.html?utm_source=chatgpt.com
- [9] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No27.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No27.pdf)
- [10] [https://www.jsps.org/newsletter/Newsletter No33.pdf](https://www.jsps.org/newsletter/Newsletter%20No33.pdf)
- [11] [https://www.jsps.org/newsletter/JSPS Newsletter43 Low.pdf](https://www.jsps.org/newsletter/JSPS%20Newsletter43%20Low.pdf)
- [12] [https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL 51.pdf](https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL%2051.pdf)
- [13] [https://www.jsps.org/jsps_newsletter/files/JSPSNL 71.pdf#page=12](https://www.jsps.org/jsps_newsletter/files/JSPSNL%2071.pdf#page=12)
- [14] [https://www.jsps.org/jsps_newsletter/files/newsletter no 77 issue.pdf](https://www.jsps.org/jsps_newsletter/files/newsletter%20no%2077%20issue.pdf)
- [15] <https://www.jsps.org/jbuk/>
- [16] <https://www.jsps.org/jbuk/network.html>
- [17] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No8.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No8.pdf)
- [18] <https://www.jsps.org/pdf/info02.pdf>
- [19] <https://www.jsps.org/pdf/info03.pdf>
- [20] <https://www.jsps.org/pdf/info04.pdf>
- [21] <https://www.jsps.org/pdf/info05.pdf>
- [22] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No1.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No1.pdf)
- [23] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No11.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No11.pdf)
- [24] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No16.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No16.pdf)
- [25] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No25.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No25.pdf)
- [26] [https://www.jsps.org/newsletter/files/JSPS Newsletter35 Low.pdf](https://www.jsps.org/newsletter/files/JSPS%20Newsletter35%20Low.pdf)
- [27] [https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL 62.pdf](https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL%2062.pdf)
- [28] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No20.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No20.pdf)

(文責: JSPS London センター長 小林直人)

Activities of JSPS UK & ROI Alumni Association (2004-2024)

[1]Outline

The JSPS UK and ROI(Republic of Ireland) Alumni Association has celebrated its 20th anniversary in 2024. The commemorative ceremony was held on 4th September at the Ashmolean Museum in Oxford, along with the 30th anniversary of JSPS London office.

The JSPS UK and ROI Alumni Association was established in 2003 by former fellows who had returned to the UK after conducting research in Japan funded by JSPS fellowship programmes. The first general meeting of the Alumni Association was held on 4th June 2004 at the Royal Society. In 2014, JSPS Tokyo Headquarter approved the membership of former JSPS fellows based in the Republic of Ireland, and the name of the association was subsequently changed to the JSP UK and ROI Alumni Association[1].

The Alumni Association is continuously expanding and currently has over 915 active members. With the support of an Executive Committee and Regional Managers, the Association works throughout the UK and Republic of Ireland with the following objectives: (1) building and maintaining academic links with Japan, (2) providing guidance to new fellows and supporting Japanese researchers working in the UK, (3) collaborating with academic and related institutions, (4) exchanging information among Alumni members, and (5) strengthening links between regional groups and Japan.

In particular, the annual Pre-departure Seminar has been held to prepare new fellows for their research experience in Japan. The Alumni Fellowship Evening allows members to network in a casual and relaxed atmosphere. Furthermore, the Bridge Fellowship (established in 2009) allows alumni members to take the opportunity to travel to Japan to maintain and strengthen research collaborations with Japanese researchers.



The JSPS UK and ROI(Republic of Ireland) Alumni Association 's Logo

[2-1] Record of Chairs and Co-Chairs)

Position	Full Name	Title	Affiliation	Years Served
Founding Chair	Peter Sammonds	Prof.	Department of Earth Sciences, University College London	2004-2006
Co-Chair	Martyn Kingsbury	Prof.	Department of Education Imperial College London	2004-2006
Chair	Martyn Kingsbury	Prof.	Department of Education Imperial College London	2006-2014
Co-Chair	Hugo Dobson	Prof.	National Institute of Japanese Studies, University of Sheffield	2006-2010
Co-Chair	Ruth Goodridge	Prof.	Faculty of Engineering, University of Nottingham	2010-2014
Chair	Ruth Goodridge	Prof.	Faculty of Engineering, University of Nottingham	2014-2017
Co-Chair	John Fossey	Prof.	Department of Chemistry, University of Birmingham	2014-2017
Chair	John Fossey	Prof.	Department of Chemistry, University of Birmingham	2017-2022
Co-Chair	Andrew Quantock	Prof.	School of Optometry and Vision Sciences, Cardiff University	2017-2022

[2-2] Current Executive Committee Members and Regional Managers

Position	Full Name	Title	Affiliation	Years Served
Chair	Andrew Quantock	Prof.	School of Optometry and Vision Sciences, Cardiff University	2022-
Co-Chair	Alessandra Devoto	Prof.	School of Biological Sciences, Royal Holloway, University of London	2022-
Executive Committee Associate	John Brazier	Dr.	School of Pharmacy, University of Reading	2014-
Executive Committee Associate	Chris Pearson	Dr.	STFC Rutherford Appleton Laboratory	2014-
Executive Committee Associate	Erica Baffelli	Prof.	School of Arts, Languages and Cultures, University of Manchester	2023-
Executive Committee Associate	Ekaterina Hertog	Prof.	Department of Sociology, University of Oxford	2023-

Regional Managers

Region	Full Name	Title	Affiliation	Years Served
Wales	Keith Shore	Prof.	School of Electronic Engineering, Bangor University	2019-
Scotland	Miranda Anderson	Dr.	School of History, Classics and Archaeology, University of Edinburgh	2017-
Northern Ireland	Davide Mariotti	Prof.	School of Engineering, Ulster University	2009-2024
Ireland	Emma Sokell	Prof.	School of Physics, University College Dublin	2009-

[3] History of activities

1. Alumni Association Foundation General Meeting (June 2004)

The first Alumni Association General Meeting was held on Friday 4th June 2004 at the Royal Society Auditorium[2]. This meeting was attended by many alumni, including overseas fellows living in the UK. Director Kanaguchi began by explaining the background to the establishment of the Alumni Association, and reported that the president and four other members had been elected with the support of the majority of members. The new Chair, Prof. Peter Sammonds, acted as MC and there were greetings and presentations from the Alumni Association Executive Committee members and all the participants



Fig. 1. Top left: Greetings from the new Chair, Prof. Peter Sammonds, Top right: Group photo in front of the Royal Society, Bottom left: JSPS Fellows sharing their experiences..

2.Pre-departure Meeting (May 2005)

The First Pre-departure Meeting for the Summer Programme participants was held on Friday 20th May 2005 at the British Council UK, jointly organised by the JSPS London Office and the British Council Japan.[3] This meeting was initiated to deepen the participants' understanding of the programme and to provide a springboard for them to continue to actively engage in Japan-UK exchanges after they return to the UK



Fig. 2. Left: Program overview, Right: Participants socializing.

3. Alumni Fellowship Evening (May 2005)

The first Alumni Fellowship Evening was held on Friday, 20th May 2005 at the Garelle Besson in London [3]. This meeting was held to provide an opportunity for researchers who have participated in JSPS programmes and those interested in Japan to exchange information about Japanese and British research, and to expand the Japanese and British research community in the UK. After an opening remarks by the Chair, Prof Sammonds, the Co-Chair, Prof Martyn Kingsbury shared his experiences in Japan.



Fig. 3. Left: Opening remarks by the Chair, Prof Sammonds, Right: Participants socializing.

4. Alumni Association Event “Evening Lecture” in Edinburgh (March 2006)

The local alumni association in Scotland is also very active, and on Wednesday, March 1, 2006, an alumni event, “Evening Lecture & Debate,” was held at The Scotch Whisky Heritage Centre in Edinburgh, where a lecture was given entitled “The Green Revolution in Africa.” After the lecture, a dinner was held, and there was a lively exchange of opinions among the more than 30 participants, including alumni association members, researchers and students from the Edinburgh area [4].



Fig. 4. Left: Participants listening intently to the lecture, Right: Panel discussion.

5. FURUSATO Award (February 2008)

A new support scheme for alumni, the “FURUSATO Award”, was launched, with two applications opened in February and November 2008, and seven awardees were selected. The aim of this scheme is to contribute to maintaining and developing research linkages between Japan and the UK through JSPS fellowships, and alumni awardees were provided with funding for academic activities (such as travel expenses to Japan).



Fig. 5. FURUSATO Award Ceremony (awarded by Director Yuko Furukawa) (4th December 2009)[6]

6. Bridge Fellowship (November 2009)

JSPS Headquarters established the Bridge Fellowship, a support programme to JSPS Alumni Members in individual countries in November 2009 [7]. This programme provides researchers who have experienced research in Japan through JSPS fellowships with the opportunity to “revisit” Japan. There were differences between the Bridge Fellowship and the FURUSATO Award in JSPS London in terms of the number of applications per year, the support costs, and the number of days.[8] The FURUSATO Award was, however, discontinued in 2014, and was consolidated into the Bridge Fellowship.

7. Symposium Scheme (October 2010)

On Friday, 8th October 2010, JSPS London began accepting applications for the Japan-UK Symposium Scheme for 2011[9]. This scheme was launched by JSPS London as a new project in June 2009, and provides financial support for speakers’ travel expenses and symposium expenses for Japan-UK joint symposiums hosted by researchers from the Japanese Researchers Based in the UK (JBUK) and the JSPS Alumni Association. In addition, on Wednesday, 20th October in 2010, JSPS London held a Pre-departure Seminar for the awardees of this scheme.



Fig. 6. Left: Pre-departure Seminar participants, Right: Award ceremony (awarded by Director Kozo Hiramatsu).

8. Regional Alumni Meeting in Glasgow (June 2012)

As part of the JSPS 80th anniversary celebrations, a social event was held on 20 June 2012 at Stravaigin restaurant in Glasgow, bringing together alumni members and Japanese researchers in the UK.[10] The event was organised by Dr James Fountaine, Alumni Association Scottish Branch Manager, and participants enthusiastically exchanged ideas on JSPS promotion activities and building a network between Japanese and UK researchers.



Fig.7. Social event.

9. Alumni Association 10th Anniversary Event (November 2014)

On Monday, 24th November 2014, the JSPS London 20th Anniversary Ceremony and the JSPS Alumni Association 10th Anniversary Event were held at the Natural History Museum in London.[11] In the morning of the same day, the Pre-departure seminar was held at the same venue. At the Anniversary event, after greetings from the organizers and guests and related lectures, the Alumni Association Awards were presented to alumni members who have achieved outstanding results in the Bridge Fellowship and Symposium Scheme.



Fig. 8. Left: Participants in the Pre-departure meeting and the Anniversary event. Top left and right: Award ceremony (awarded by Director, Kunio Takeyasu).

10. Japan-UK Research Promotion Conference (November 2016)

On 16 November, the JSPS London Office held “Japan-UK Research Promotion Conference 2016” at the Embassy of Japan in the UK. This is a networking event held for members of the JSPS UK & ROI Alumni Association and the Japanese Researchers’ Network Based in the UK (JBUK). The conference works to generate new ideas for UK-Japan joint research and assist the participants in identifying joint-research partners. The alumni association members and JBUK members will form the core of research collaboration with Japan in the UK [12].



Fig.9. Left: Main guests and organisers. Middle: Director Nobuo Ueno, Right: Participants.

11. Professor John S. Fossey Memorial Symposium (March 2023)

A symposium in memory of Professor John S. Fossey (Department of Chemistry, University of Birmingham), former Chair of the JSPS Alumni Association, who passed away suddenly in April 2022 in his mid-40s, was held at the University of Birmingham on 29th and 30th March 2023. Prominent researchers from around the world, including Professor Osamu Kobayashi of the University of Tokyo, who was a close friend of Professor Fossey, gave presentations in memory of the professor. Naoto Kobayashi, Director of JSPS London, also delivered a speech of eulogy and gratitude to the professor [13].



11. Professor John S. Fossey Memorial Symposium (March 2023)

12. Alumni Association 20th Anniversary Event (September 2024)

In the afternoon of 4th September 2024, the JSPS London 30th Anniversary Ceremony and the JSPS Alumni Association 20th Anniversary Event were held at the Ashmolean Museum in Oxford, with approximately 100 people in attendance [14]. The Pre-departure seminar was also held at the same venue in the morning. The Anniversary event included greetings from the organizers and guests, research presentations by alumni members, and a panel discussion by speakers. The Alumni Association Awards were then presented to alumni members who have achieved outstanding results in the Bridge Fellowship and Symposium Scheme.



Fig. 11. Left: Group photo for the Anniversary event, Center and Right: Alumni Award Awardees.

【References】

- [1] <https://www.jsps.org/alumni/about/>
- [2] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No1.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No1.pdf)
- [3] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No5.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No5.pdf)
- [4] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No8.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No8.pdf)
- [5] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No19.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No19.pdf)
- [6] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No23.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No23.pdf)
- [7] [https://www.jsps.go.jp/file/storage/general/english/e-quarter/quarterly pdf/jsps quarterly29.pdf](https://www.jsps.go.jp/file/storage/general/english/e-quarter/quarterly%20pdf/jsps%20quarterly29.pdf)
- [8] https://jsps.blogat.jp/alumni/furusato.html?utm_source=chatgpt.com
- [9] [https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter No27.pdf](https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter%20No27.pdf)
- [10] [https://www.jsps.org/newsletter/Newsletter No33.pdf](https://www.jsps.org/newsletter/Newsletter%20No33.pdf)
- [11] [https://www.jsps.org/newsletter/JSPS Newsletter43 Low.pdf](https://www.jsps.org/newsletter/JSPS%20Newsletter43%20Low.pdf)
- [12] [https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL 51.pdf#page=2](https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL%2051.pdf#page=2)
- [13] [https://www.jsps.org/jsps newsletter/files/JSPSNL 71.pdf#page=12](https://www.jsps.org/jsps%20newsletter/files/JSPSNL%2071.pdf#page=12)
- [14] [https://www.jsps.org/jsps newsletter/files/newsletter no 77 issue.pdf](https://www.jsps.org/jsps%20newsletter/files/newsletter%20no%2077%20issue.pdf)

(Responsible for the contents: Director for JSPS London Naoto Kobayashi)

Alumni Awardees Meeting

JSPS London センター長、小林 直人

JSPS International Programme Coordinator, Polly Watson

On 4th September 2024, the 30th anniversary of the JSPS London and the 20th anniversary of the JSPS UK & Ireland Alumni Association were celebrated at the Ashmolean Museum in Oxford. Researchers who have greatly contributed to research collaboration between Japan and the UK through the JSPS Bridge Fellowship and Symposium Scheme were selected and awarded. The Alumni Awardees Meeting was held on 17th February 2025 to discuss the role of JSPS fellowships, JSPS and Alumni activities.

The discussion started with a self-introduction from each participant and an outline of their research conducting and their collaborations with Japan. The questions are as follows:

- (1) How has your experience with the JSPS Fellowship or Symposium Scheme and subsequent Japan-UK research collaboration contributed to your own research? What concrete outcomes have you achieved?
- (2) How could we expand Japan-UK research collaboration more widely and more effectively in the future?
- (3) How should JSPS provide support?
- (4) What kind of contribution *could the Alumni Association make?*



Fig.1. Participants of the Alumni Awardees Meeting

2024年9月4日、オックスフォードのアシュモレアン博物館で、JSPSロンドンの30周年とJSPS英国アイルランド同窓会の20周年を記念する式典が開催されました。JSPSブリッジフェローシップとシンポジウム制度を通じて日本と英国の研究協力に大きく貢献した研究者が選出され、表彰されました。2025年2月17日には、JSPSフェローシップ、JSPS、同窓会活動の役割について議論するため、同窓会表彰者会議が開催されました。

3人の同窓会賞受賞者に加えて、同窓会の会長・副会長・執行委員、地域マネージャーが参加し、JSPSロンドン・オフィスからも4名が参加しました。

議論は、参加者各自の自己紹介、研究の実施状況、日本との協力関係の概要から始まりました。質問内容は次のとおりです。

- (1) JSPS フェローシップまたはシンポジウム・スキーム、およびその後の日英研究協力の経験は、あなた自身の研究にどのように貢献しましたか？どのような具体的な成果を達成しましたか？
- (2) 今後、日英研究協力をより広く、より効果的に拡大するにはどうすればよいですか？
- (3) JSPS はどのように支援を提供すべきですか？
- (4) 同窓会はどのような貢献ができますか？

これらの質問は会議の議論の基礎となり、ブリッジフェローシップやシンポジウム・スキームなどのJSPSフェローシップや同窓生賞、またはさらなる日英研究協力に関する参加者の経験と、それが研究にどのように影響したかを議論することになりました。まこのディスカッションでは、JSPSロンドンと英国アイルランド共和国同窓会が今後どのようにすれば日英研究協力を最も効果的に支援できるかについてのアイデアや意見の共有も行われました。

Participants

Awardees:

Dr Chris Pearson (UKRI STFC RAL Space),
Dr Henrik Stotz (University of Hertfordshire)
Dr Mohammed Ismail (University of Hull)
(Prof Ekaterina Hertog (University of Oxford): absent)

Executive Committee Members:

Prof Andrew Quantock (Chair, Cardiff University)
Prof Alessandra Devoto (Co-Chair, Royal Holloway,
University of London)
Prof Erica Baffelli (University of Manchester)

Regional Managers:

Prof Alan Shore (Wales, Bangor University)
Dr Miranda Anderson (Scotland, University of Edinburgh)
Prof Emma Sokell (Ireland, University College Dublin)

JSPS London:

Prof Naoto Kobayashi (Director)
Dr Yumiko Myoken (Deputy Director)
Ms Yui Miyaura (International Programme Associate),
Ms Polly Watson (International Programme Coordinator) (*)
(*) Moderator

These questions were to be the basis of the meeting's discussion and cover the experiences of the attendees with JSPS fellowships and alumni awards such as the Bridge Fellowship and Symposium Scheme or further Japan-UK research collaboration and how these have influenced their research.

(1) For the 1st question “How is your experience with a JSPS fellowship or JSPS London Symposium Scheme award and how has subsequent Japan-UK research collaboration contributed to your own research and concrete outcomes that you've had?”

Dr Ismail explained that his first contact with JSPS was by being awarded the joint JSPS-Royal Society Bilateral project scheme to develop catalysts for hydrogen fuel cells. After this grant, Dr Ismail joined the UK and Ireland JSPS Alumni Association and was awarded the JSPS London Symposium Scheme twice, holding events in 2021 and 2024 to disseminate work and initiate collaboration between Japan and the UK on hydrogen and fuel cell technologies. These events have been instrumental in securing significant research grants with the EPSRC and first collaboration with colleagues in Japan, specifically with Professor Masamichi Nishihara and Professor Steven Lyth from Kyushu University. Also, Dr Ismail has been awarded another travel grant from the Daiwa Anglo-Japanese Foundation to again work with Professor Nishihara. Using these grants, Dr Ismail and his PhD Students have visited Professor Nishihara's lab and also Professor Takahashi's lab from Hokkaido University and they have published seven high quality papers in respected journals. From the symposia supported by JSPS London, Dr Ismail has also initiated collaboration with Professor Manabu Tanaka from Tokyo Metropolitan University and he is active in a very promising technology of anion exchange membrane water electrolyzer.

(1) 最初の質問「JSPSフェローシップやJSPSロンドンのシンポジウム・スキームの受賞経験やその後の日英研究協力は、ご自身の研究や具体的な成果にどのように貢献しましたか？」について

イスマイル博士は、JSPSとの最初の接点は、水素燃料電池用触媒の開発を目的としたJSPSと英国王立協会の共同二国間プロジェクト制度の受賞だったと説明しました。この助成金の後、イスマイル博士は英国・アイルランドJSPS同窓会に入会し、JSPSロンドンのシンポジウム・スキームを2回受賞し、2021年と2024年にイベントを開催して、水素および燃料電池技術に関する日本と英国の研究成果を広め、協力関係を開始しました。

これらのイベントは、EPSRCからの重要な研究助成金の獲得や、日本の同僚、特に九州大学の西原正通教授とステューブン・リス教授との初めての協力関係の確立に役立ちました。また、イスマイル博士は、大和日英基金から再度の旅費補助金を授与され、再び西原教授と研究を行うことができました。この補助金を利用して、イスマイル博士と博士課程の学生は、西原教授の研究室と北海道大学の高橋教授の研究室を訪問し、権威ある学術誌に7本の質の高い論文を発表しました。

JSPSロンドンが支援するシンポジウムから、イスマイル博士は東京都立大学の田中学教授との共同研究も開始し、陰イオン交換膜水電解装置という非常に有望な技術に取り組んでいます。



Fig.2. Alumni Awardees.
From left to right: Dr Ismail, Dr Stotz, Dr Pearson.

Dr Chris Pearson shared his experiences of JSPS Fellowships. His first JSPS Fellowship was in 1999 to work at JAXA (Japan Aerospace Exploration Agency) and he emphasized how this Fellowship was fundamentally important in being involved in a major Japanese space mission and making connections and setting the foundations for collaboration between the UK and Japan. Dr Pearson explained this collaboration was further supported by a JSPS Invitation Fellowship in 2005, again at a very vital time in working on a Japanese space mission development close to launch. This fellowship provided the opportunity for face-to-face communication which was important at a time when video calls were not invented. He commented the third fellowship he received from JSPS, a BRIDGE Fellowship in 2010, also came at a good time because this was a post launch, post mission phase and gave him the opportunity to work directly with Japanese collaborators on science exploration and resulted in approximately 8 collaborative papers with Japanese colleagues. The follow-on JSPS London Symposium and Seminar Scheme award that Professor Pearson received in 2014 gave him the opportunity in the UK to showcase the results from this space mission to attendees from all over the world, that previously had only been done internally in Japan at various conferences. The total effect of all of this JSPS funding has resulted in over 100 UK-Japan science publications and almost 80 collaborative conference proceedings. These are very solid metrics that measure the success and the influence that JSPS has given. Moreover, there are the subtle influences of these collaborative visits that JSPS supports, certainly in terms of future collaborations, those connections that are already there. Regarding the current alien worlds space mission Dr Pearson is working on, Japan is likely to be a partner for hardware devices and he hopes to extend the collaborative work to other aspects as well.

ピアソン博士は、JSPSフェローシップの経験について語りました。博士が初めてJSPSフェローシップを受けたのは1999年で、JAXA（宇宙航空研究開発機構）で勤務しました。博士は、このフェローシップが、日本の主要な宇宙ミッションに関わり、英国と日本の協力関係を築き、その基盤を築く上で、いかに根本的に重要であったかを強調しました。ピアソン博士は、この協力関係は、2005年のJSPS招聘フェローシップによってさらにサポートされたと説明しました。これも、打ち上げ間近の日本の宇宙ミッション開発に取り組む非常に重要な時期でした。このフェローシップは、ビデオ通話が発明されていなかった時代には特に重要で、対面でのコミュニケーションの機会を提供してくれました。

彼は、JSPSから3度目のフェローシップである2010年のBRIDGEフェローシップも、打ち上げ後、ミッション後の段階であったため、タイミングが良く、科学探査で日本の協力者と直接働く機会が得られ、日本の同僚との共同論文が約8本生まれたとコメントしました。ピアソン教授は2014年に引き続きJSPSロンドンシンポジウム・スキームを受賞し、この宇宙ミッションの結果を英国で世界中の参加者に披露する機会を得ました。これは、それまで日本国内のさまざまな会議でのみ行われていたものです。このJSPSの資金援助の総合的な効果として、100を超える日英科学出版物と約80の共同会議録が生まれました。これらは、JSPSがもたらした成功と影響力を測る非常に確かな指標です。

さらに、JSPSが支援するこれらの共同訪問には、将来の共同研究や既存のつながりという点で確かに繊細な影響があります。ピアソン博士が現在取り組んでいる異星世界の宇宙探査ミッションに関しては、日本がハードウェア機器のパートナーになる可能性が高く、博士は共同作業を他の面にも拡大したいと考えています。



Fig.3. Dr. Chris Pearson explaining the work in Japan (RAL Space video) .

Dr Henrik Stotz spoke about his experiences of using JSPS funding and the concrete outcomes this has produced. Dr Stotz's interactions with Japan date back to 2008-2009 when he visited the Riken Plant Science Centre on a JSPS Long Term Invitation Fellowship. The experience changed the way he looked at biology and from then on he considered himself a systems biologist. At this RIKEN centre Dr Stotz, worked with Dr Yuji Kamiya, a leading expert on plant hormones and Dr Katsuki Saito, a metabolomic specialist and they jointly published two papers shortly after the visit. Dr Stotz' next interaction with Japan was in 2015 when his PhD student was working on the impact of temperature on disease resistance and as part of that Dr Stotz worked on the basic mechanisms and became interested in specific immune receptors.

After doing genomic comparisons Dr Stotz found this was very closely located next to another critical gene that's important for fusarium resistance in vegetable brassicas that Japanese researchers, particularly Professor Keiichi Okazaki at Niigata University had published on. Dr Stotz made contact with Professor Okazaki and also Dr Ryo Fujimoto from Kobe University, they met shortly after that at a conference in Australia and after that they were successful in obtaining a JSPS BRIDGE Fellowship.

Following this Dr Stotz was awarded another Royal Society Fellowship to continue his exchanges with Professor Okazaki and Dr Fujimoto in Japan and also they attended a conference at Dr Stotz' university. Two joint papers have resulted from this collaboration so far and Dr Stotz has been awarded a JSPS Long Term Invitation Fellowship again this year to visit Kobe University to finish research they have initiated and publish on the findings and also Dr Stotz' student is making good progress on continuing the project on immune receptors.

ヘンリク・ストッツ博士は、JSPSの助成金を利用した経験とそれがもたらした具体的な成果について語りました。ストッツ博士の日本との関わりは、JSPS長期招聘フェローシップで理化学研究所植物科学センターを訪れた2008年から2009年にまで遡ります。この経験により生物学の見方が変わり、それ以来、彼は自分自身をシステム生物学者と考えるようになりました。この理化学研究所のセンターで、ストッツ博士は植物ホルモンの第一人者である神谷勇治博士、メタボロミクスの専門家である齊藤和季博士とともに働き、訪問後すぐに2本の論文を共同で発表しました。

ストッツ博士の次の日本との関わりは、博士課程の学生が温度が病害抵抗性に与える影響について研究していた2015年で、その一環として彼は基本メカニズムに取り組んで特定の免疫受容体に興味を持つようになりました。ゲノム比較を行った後、ストッツ博士は、これが、日本の研究者、特に新潟大学の岡崎桂一教授が発表した、野菜のアブラナ科植物におけるフザリウム耐性にとって重要な別の重要な遺伝子のすぐ隣に位置していることを発見しました。ストッツ博士は、神戸大学の岡崎教授および藤本龍博士と連絡を取り、その直後にオーストラリアでの会議で二人は会い、その後、JSPS BRIDGE フェローシップを獲得することに成功しました。

これに続いて、ストッツ博士は、日本で岡崎教授および藤本博士との交流を継続するために、別の王立協会フェローシップを受賞し、また二人はストッツ博士の大学での会議にも出席しました。この研究協力からこれまでに2つの共同論文が生まれており、ストッツ博士は今年もJSPS長期招聘フェローシップを受賞して神戸大学を訪問し、二人が開始した研究を完了して研究結果を発表しています。また、ストッツ博士の学生は免疫受容体に関するプロジェクトの継続で順調に進歩しています。



Fig.4. Dr. Stotz with Prof Ryo Fujimoto (Kobe University, 2019).

(2) For the 2nd question, “How can we expand Japan-UK research collaboration more widely and more effectively in the future?”

Dr Ismail said he thought the level of joint collaboration is adequate and at the same time there is a strong need to expand these kind of collaborative funding opportunities between the UK and Japan. Dr Ismail suggested a one page guide is made by JSPS to highlight joint priority research areas, available funding schemes and also notable success stories and such an initiative could boost the level of collaboration between researchers from the UK and Japan. He also mentioned the Royal Society’s International Collaboration Award is good because it allows younger researchers to engage in research activities that can drive collaboration. He suggested PhD supervision between researchers from the UK and Japan would foster and nurture deeper research partnerships.

However, in reaction to this point, **Professor Quantock** made a note of caution that visiting PhD students to the UK or Japan may need to pay student fees and he doesn’t want to see JSPS money go into university coffers and just disappear into a fee structure. It should be really spent on the people themselves.

Dr Pearson commented there is quite a lot of siloing between Japan and the UK, especially in astrophysics and he suggested a proactive initiative to highlight the collaborative opportunities to work together and funding options on the Japan side.

Professor Devoto gave suggestions for JSPS London having more social media presence for the academic community and showing visibility of research funding opportunities and further discussion is needed of what is possible. She commented that social media tends to be looked at by younger people and social media could be used to highlight JSPS calls in a modern way, especially through posting short videos of successful cases.

(2) 2番目の質問「今後、日英研究協力をより広く、より効果的に拡大するにはどうすればよいか」について

イスマイル博士は現在の共同協力のレベルは十分であると考えられるものの、同時に英国と日本間でこのような共同資金提供の機会を拡大する必要性が強くあると述べました。イスマイル博士は、JSPSが共同の優先研究分野、利用可能な資金提供スキーム、注目すべき成功事例などを強調する1ページのガイドを作成することを提案しました。そのような取り組みにより、英国と日本の研究者間の協力レベルが向上する可能性があるかと述べました。

また王立協会の国際協力賞は、若い研究者が協力を推進できる研究活動に従事できるため、大変良いものだと述べました。英国と日本の研究者間の博士課程の指導により、より深い研究パートナーシップが促進され、育まれるだろうと示唆しました。

しかし、**クアントック教授**は、この点について英国または日本を訪問する博士課程の学生は学費を支払う必要があるかもしれないと警告し、JSPSの資金が大学の金庫に入り、経費体系の中に消えていくのを見たくないと言いました。資金は実際には博士学生に使われるべきです。



Fig.5. Professor Andrew Quantock

ピアソン博士は、日本と英国の間には、特に天体物理学において、かなりサイロ化が進んでいるとコメントし、日本側で共同研究の機会や資金調達の選択肢を強調する積極的な取り組みを提案しました。

デヴォート教授は、JSPSロンドンが学術コミュニティ向けにソーシャルメディアでもっと存在感を示し、研究資金の機会を目立たせることを提案しました。そしてソーシャルメディアで何ができるかについてさらに議論の必要があると言いました。彼女は、ソーシャルメディアは若い人たちが見る傾向があり、特に成功事例の短いビデオを投稿するなど、ソーシャルメディアを使用してJSPSの公募を現代的な方法で強調できるとコメントしました。

Professor Devoto suggested JSPS London could have accounts on X, Blue Sky, Instagram, LinkedIn or Researchgate as platforms used most by researchers at the moment. She mentioned the Gatsby Foundation posts videos from younger research awardees of their experiences both on their research and social life.

To this point **Dr Pearson** added that also JSPS funding calls could be put on various mailing lists to raise visibility, for example in his department there is the Astro list that sends out all information on funding proposals and conferences and funding calls from JSPS can be added to that as well.

Added to the point of JSPS connecting more to younger researchers, **Professor Shore** explained he is on the membership committee of the UK Young Academy of the Learned Society of Wales. They have a very active early career researcher network and they would welcome a contribution from JSPS about funding opportunities and this would be a more direct contact with younger people rather than through social media.

Dr Stotz also commented that JSPS visits to universities to explain about funding opportunities, as JSPS London visited his university in 2014, is an effective way to increase the presence of JSPS.

Furthermore, **Professor Quantock** added that JSPS could consider having a champion in each university as someone who could be a conduit to the funding calls.

Professor Devoto raised the issue of misalignment sometimes between the funding requirements provided by Japan and the UK. She highlighted the point made by **Professor Hertog** (Awardee) in her written response that the incentives between countries are sometimes different. In her experience UK funding had bought out the UK team members' time to dedicate specifically to research but Japanese collaborators didn't receive the same time buyout. This made it challenging to work on the same timeframe and addressing these structural differences would greatly improve our ability to collaborate effectively.

デヴォート教授は、JSPSロンドンが、現在研究者が最もよく利用するプラットフォームとして、X、Blue Sky、Instagram、LinkedIn、Researchgateにアカウントを持つことができると提案しました。同教授は、ギャツビー財団が、若手研究受賞者による研究と社会生活の両方での体験を動画で投稿していると述べました。

この点について、**ピアソン博士**は、JSPSの資金募集をさまざまなメーリングリストに掲載して認知度を高めることもできると付け加えました。例えば、同博士の部門には、資金提供の提案や会議に関するすべての情報を送信するAstroリストがあり、JSPSからの資金募集もそこに追加することができます。

JSPSが若手研究者ともっとつながるという点に加えて、**ショア教授**は、自分自身がウェールズ学士会の英国若手アカデミーの会員委員会に所属していると説明しました。同アカデミーには非常に活発な若手研究者ネットワークがあり、資金提供の機会に関するJSPSからの貢献を歓迎しています。ソーシャルメディア経由よりも若手とのより直接的なコンタクトが取れるだろうと述べました。

ストッツ博士はまた、2014年にJSPSロンドンがストッツ博士の大学を訪問したように、JSPSが大学を訪問して資金提供の機会について説明することは、JSPSの存在感を高める効果的な方法であると述べました。さらに**クアントック教授**は、JSPSは各大学に資金提供の連絡役となる人物を置くことを検討するとよいと付け加えました。

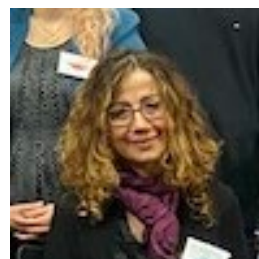


Fig.6. Professor Alessandra Devoto

デヴォート教授は、日本と英国が提供する資金提供要件が時として不一致になるという問題を提起しました。彼女は、国によってインセンティブが異なることがあるという、**ヘルトック教授**（同窓会賞受賞者）の書面による回答で指摘された点を強調しました。彼女の経験では、英国の資金提供は、英国のチームメンバーが研究に専念する時間を買うが、日本の協力者は同じ時間を買って貰えませんでした。そのため、同じ時間枠で作業することが困難であり、これらの構造的な違いに対処することで、効果的に協力する可能性が大幅に向上するだろうと述べました。

(3) For the last questions, “how should JSPS provide support and what contribution could the Alumni Association make?”.

Dr Pearson commented that JSPS funding supports researchers very well and the BRIDGE Fellowship is good for providing further support. Another idea is to introduce quick fire funding that could be used for things like future horizon scanning or initial start-up discussions that might lead to future collaborations. This is something that could be applied for and approved very quickly and could include either inviting some Japanese researchers to the UK for a meeting or UK researchers go to Japan. He commented that this doesn't have to be a large amount of funding because some of these activities don't evolve into anything but it is more about providing a little help that might end up transforming into a much larger collaboration in the future.

Dr Stotz also had a similar idea of a proof of concept grant that can also be used to finish certain projects and the application process should be quick response.

Professor Baffelli also agreed that small pilot grants were useful to start setting up a network and then using that network, including early career researchers, and other collaborators in Japan. In her experience such small grants are important as they help to map or create the network and then work together to apply for larger grants.

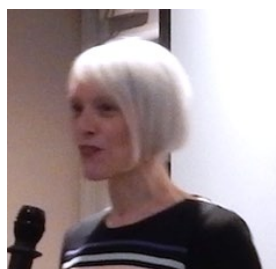
Dr Ismail told that he thought the level of support provided by JSPS is very good and should be sustained and expanded, especially workshops and networking events. He hopes JSPS could initiate funding schemes that involve industry from either the UK or Japan in order to translate joint research outcomes into real applications. The Alumni Association could make a mentorship program to support early career researchers, through highlighting research success stories and providing guidance and funding opportunities. He thinks that JSPS helping researchers to foster links with industry and highlighting these opportunities is important.

(3) 最後の質問、「JSPSはどのように支援すべきか、同窓会はどのような貢献ができるのか？」について

ピアソン博士は、JSPSの資金は研究者を非常によくサポートしており、BRIDGEフェローシップはさらなるサポートを提供するのに適しているとコメントしました。もう1つのアイデアは、将来のホライズン・スキヤニングや将来のコラボレーションにつながる可能性のある初期のスタートアップ・ディスカッションなどに使用できる迅速な資金提供を導入することです。これは非常に迅速に申請して承認されるものであり、会議のために何人かの日本の研究者を英国に招待するか、英国の研究者が日本に行くことを含む可能性があります。彼は、これらの活動のいくつかは何も発展しないので、これは多額の資金である必要はないが、将来的にははるかに大きなコラボレーションに変わる可能性のある小さな支援を提供することが重要であるとコメントしました。

ストッツ博士は、特定のプロジェクトを完了するためにも使用できる概念実証助成金と同様のアイデアを持っており、申請プロセスは迅速に対応する必要がありますと述べました。

バフェッリ教授も、小規模なパイロット助成金は、ネットワークの構築を開始し、若手研究者や日本の他の協力者を含むそのネットワークを活用するのに有益であることに同意しました。



彼女の経験では、このような小規模助成金は、ネットワークのマッピングや構築に役立ち、その後、より大きな助成金を申請するために協力するため重要です。

Fig.7. Professor Erica Baffelli

イスマイル博士は、JSPSが提供するサポートのレベルは非常に高く、特にワークショップやネットワーキングイベントは維持および拡大されるべきであると述べました。彼は、共同研究の成果を実際のアプリケーションに変換するために、JSPSが英国または日本のいずれかの産業界を巻き込んだ資金提供スキームを開始できることを願っています。同窓会は、研究の成功事例を強調し、ガイダンスと資金提供の機会を提供することで、若手研究者を支援するメンターシッププログラムを作成できます。彼は、JSPSが研究者が産業界とのつながりを育むのを支援し、これらの機会を強調することが重要だと考えています。

Professor Quantock responded that he felt the BBSRC Partnering Award with Japan worked well for bilateral collaboration. He has received this partnering award, it lasted four-years and the amount of funding was £48,000. This award was used for the two way exchange of three early career researchers with Osaka University and also two symposia, one held at Cardiff University, including the keynote speaker, Nobel Laureate Professor Sir Martin Evans who spoke about his work on stem cells and the other symposia was held at Osaka University. He commented that these exchanges worked really well and were productive. These partnering awards are 100% funded by the BBSRC, they are held with specific countries such as India and Brazil and they are responsive mode calls so the topic is open.

Professor Quantock further acknowledged that the achievements of JSPS London are great and it is important JSPS keeps its autonomy but more joint calls with UKRI could help to leverage funds and help JSPS to get better results from their funding.

Professor Baffelli added that she had also been awarded a UKRI, UK-Japan Connection Grants of 2019 that was extended into the COVID-19 pandemic. She found this grant to be very useful to set up a network and help it to expand. She explained the structure was similar to the BBSRC partnering award as an early career researcher from Japan came to work in her group and she visited Japan with one of her students. Also workshops in Tokyo and at Professor Baffelli's University, the University of Manchester, were organized. She said this grant was effective in enabling her to build up networks for later collaborations.

Further suggestions about support from JSPS and the Alumni Association came from **Dr Miranda Anderson**. Her idea is to hold more cross-disciplinary international events and create a Japanese Arts and Culture Society in Scotland and a Japanese Study Centre for Scotland as well. This idea was formulated around the JSPS event with Alumni in Scotland held online in March 2024. She explained that language and culture scholars in

クアントック教授は、日本とのBBSRCパートナー賞は二国間協力にうまく機能したと答えました。同教授はこのパートナー賞を受賞しており、期間は4年間で、資金総額は4万8000ポンドでした。この賞は、大阪大学との若手研究者3名の双方向交流と、2つのシンポジウムに使用されました。1つはカーディフ大学で開催され、基調講演者としてノーベル賞受賞者のマーティン・エヴァンス教授が幹細胞に関する研究について講演しました。もう1つのシンポジウムは大阪大学で開催されました。同教授は、これらの交流は非常にうまく機能し、生産的だったとコメントしました。これらのパートナー賞は、BBSRCが100%資金を提供し、インドやブラジルなどの特定の国と開催され、応答型の募集であるため、トピックはオープンです。彼はさらに、JSPSロンドンの成果は素晴らしいと認め、JSPSが自主性を維持することが重要ですが、UKRIとの共同募集を増やすことで資金を活用し、JSPSが資金からより良い結果を得ることができると述べました。

バッフェッリ教授は、2019年にUKRIから日英コネクション助成金も受賞しており、それがCOVID-19パンデミック中も延長されたと付け加えました。この助成金はネットワークの構築と拡大に非常に役立ったと述べました。教授は、日本の若手研究者が教授のグループで働くようになり、教授も学生の1人とともに日本を訪れたことから、この構造はBBSRCパートナー賞に似ていると説明しました。また、東京とバッフェッリ教授の大学であるマンチェスター大学でワークショップも開催されました。教授は、この助成金は後の共同研究のためのネットワーク構築に大変効果的だったと語りました。

ミランダ・アンダーソン博士から、JSPSと同窓会からの支援に関するさらなる提案がありました。アンダーソン博士のアイデアは、より多くの学際的な国際イベントを開催し、スコットランドに日本芸術文化協会とスコットランド日本研究センターを設立することです。このアイデアは2024年3月にオンラインで開催したスコットランド同窓会とのJSPSイベントを中心に形成されました。彼女は、スコッ



Fig.8. Left: Dr Miranda Anderson
Right: Professor Alan Shore

Scotland are especially keen to have a Japanese studies centre and there is a circling network across Scottish Universities that can host high profile speakers from Japan. She suggested such speakers could also visit London to give a talk hosted by JSPS London and putting a video from the event online would help to raise the presence of the work of JSPS.

Professor Sokell raised another point connected to increasing the presence of JSPS London's work through a co-funding initiative for example between JSPS and Research Ireland. She explained Research Ireland is a new government research funding agency that merges Science Foundation Ireland and the Irish Research Council. Their corporate plan is now being formulated and is due to be finished by May 2025, so now would be timely for JSPS to discuss with them about funding initiatives. Professor Sokell commented that the Irish Research Council had lots of funding for broad disciplines and this new merged entity might be a better match to work with JSPS. Also, Science Foundation Ireland struggled to arrange peer review and they had a lot of programs where the peer review was done by a partner and they paid them a matching fund.

Also, another point **Professor Sokell** made about support JSPS London and its Alumni Association could provide is a website where researchers in Japan could post available opportunities and people looking to apply could see was there something that matched their area of expertise. This is close to the work JSPS-Net is doing at the moment, which was established by JSPS Tokyo to create a network of researchers worldwide and is a place to share job and research collaboration opportunities.

(4) Closing

At the end of the conference, **Professor Naoto Kobayashi**, Director of JSPS London, concluded by saying that today's discussions have been very useful and he was very inspired by the points raised by everyone about the future role of JSPS London and its alumni association. He also suggested that such online conferences be held regularly, as well as more events be held regionally in England, Scotland, Wales and Ireland.

トランドの言語・文化学者は、日本研究センターの設立を特に熱望しており、スコットランドの大学には、日本から著名な講演者を招聘できるネットワークが広がっています。彼女は、そうした講演者がロンドンを訪れ、JSPS ロンドン主催の講演を行うこともできると提案し、そのイベントのビデオをオンラインで公開すれば、JSPSの活動の認知度を高めるのに役立つだろうと述べました。

ソケル教授は、JSPSとリサーチ・アイルランドの共同資金提供イニシアチブなどを通じて、JSPS ロンドンの研究の存在感を高める別の点を指摘しました。彼女は、リサーチ・アイルランドは、サイエンス・ファウンデーション・アイルランドとアイルランド研究会を統合した新しい政府研究資金提供機関であると説明しました。彼らの企業計画は現在策定中で、2025年5月までに完了予定であため、JSPSが資金提供イニシアチブについて話し合うには今が適切なタイミングであると説明しました。ソケル教授は、アイルランド研究会は幅広い分野に多くの資金を提供していて、この新しい統合組織はJSPSと協力するのに適しているとコメントしました。また、サイエンス・ファウンデーション・アイルランドはピアレビューの手配に苦労しているので、パートナーがピアレビューを行い、彼らがマッチングファンドを支払うプログラムが多くあることを指摘しました。また、**ソケル教授**がJSPS ロンドンとその同窓会が提供できるサポートに関する別の点は、日本の研究者が利



Fig9. Professor Emma Sokell

用可能な機会を掲載し、応募を希望する人が自分の専門分野に一致するかどうかを確認できるWebサイトです。これはJSPS-Netが現在行っている活動に近いものです。JSPS-Netは、世界中の研究者のネットワークを構築し、仕事や研究の協力の機会を共有する場として、JSPS 東京によって設立されました。

(4) おわりに

この会議の終わりに、JSPS ロンドンの小林直人所長は、本日の議論が大変有益で JSPS ロンドンとその同窓会の将来の役割について提起された点に大変刺激をうけ、感謝したいと議論を締めくくりました。また彼は、このようなオンライン会議を定期的で開催するとともに、イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランドでもより多くのイベントが地域的に開催されるとよいと付け加えました。

Self-introductions

Dr Chris Pearson

As an astrophysicist studying galaxy evolution, he covered a broad range of research areas. He has been supported by 4 JSPS Fellowships and the JSPS London Symposium and Seminar Scheme to work with JAXA on modelling and simulations for surveys for future space missions with the European Space Agency.

Dr Henrik Stotz

He introduced his work with Niigata University that has been supported by 2 JSPS Fellowships on crop protection and vegetable and crop species of brassica and that led him to initiate a collaboration with Japanese colleagues from the University of Niigata.

Dr Mohammed Ismail

He explained about his work on enhancing efficiency, durability, and affordability of hydrogen convergent technologies, including fuel cells and electrolyzers, and how this is mainly achieved by developing innovative materials and designs, including development of several trapezoidal flow channels, that has the capability of improving the fuel cell performance by up to 20 percent. He has been working with Kyushu University and Toyota Motor Europe to fabricate composite membranes to enhance durability and cost effectiveness of fuels using non-precious catalysts.

Professor Andrew Quantock

His research is in biophysics, studying structure and function of ocular tissues, namely the cornea and sclera. Professor Quantock explained his interactions with Japan started with a JSPS Short Term Postdoctoral Fellowship in 2000 working on protein-protein extracellular matrix interactions at the Kyoto Prefectural University of Medicine. He has sent his students and postdocs to Tohoku, Doshisha and Osaka Universities to continue his collaboration projects.

Professor Alessandra Devoto

She is a plant biologist whose expertise is on plant responses to stress. With the support of 2 JSPS

Fellowships and the JSPS London Symposium and Seminar Scheme, she has been working with the RIKEN Center for Sustainable Resource Science since 2009 and they have joint publications on mechanisms of regulator responses of plants to stress during drought.

Professor Erica Baffelli

She spoke about her work on religion in contemporary Japan and her current project on emotional belongings on minority Buddhist communities with Ochanomizu University. She also explained she has been collaborating with Tokyo University for 25 years and her most recent work with them on Buddhism, AI and robotics will be disseminated at a symposium supported by the JSPS London Symposium and Seminar Scheme at the end of February 2025.

Professor Alan Shore

His research is on photonics and more specifically on semiconductor nano lasers, a line of research that started with a JSPS Invitation Fellowship in 2011 working with the Nara Institute of Science and Technology (NAIST).

Dr Miranda Anderson

Her work is on cognitive approaches to culture and how that relates to development of technology as well as education. Dr Anderson is collaborating with another member of the Alumni Association Executive Committee, Professor Ekaterina Hertog, on this topic.

Professor Emma Sokell

Her research is on atomic molecular and plasma physics. Her research partnership with Japan started in 1997 with a JSPS Standard Postdoctoral Fellowship to work at the University of Electro-Communications, Tokyo. For 25 years, they have been working on laser plasmas as a light source to experimentally investigate transitions in different ions. She currently has a large European Research Council Synergy Grant with her partners in Japan as named collaborators to work on experiments and calculations to inform models of kilonova mergers and where heavy metals come from.

英国の機関紹介

デザイン・ミュージアム (Design Museum)



最先端のデザイン技術及びデザイン空間を意識して改装された建物

デザイン・ミュージアムといえば、個人的にあまり良い印象を持っていなかった。2000年代初期のことなので記憶もあいまいな部分もあるということを断っておく。ここは以前から行きたい場所の一つでもあり、ガイドブックを頼りに訪れたものの、誤った情報だったようで見つけれなかった。その後ロンドンのサウスバンクにあることを知り、楽しみにして訪れたが、期待していたものとは異なり、まるで大学の学園祭の延長のような雰囲気であった。やかんの変遷の展示では埃がかぶっていたように記憶している。ただがっかりしながら帰ったことははっきりと覚えている。

そして2016年に移転をしたというニュースを聞くまでその存在を全く忘れていた。ニュースを見る限り以前訪れた場所よりも、ようやくデザイン・ミュージアムと呼べる風格のある建物に収まったようだ。そしてまた記憶から遠のいていたが、2024年4月にその名前を再び耳にすることとなった。

デザイン・ミュージアムが独立研究機関(IRO)の認定を受けたというのである。これはUKリサーチ・イノベーション(UKRI)の一部門である英国芸術・人文科学研究会議(AHRC)がデザイン・ミュージアムに対してIROのステータスを授与したもので、大学と同等の研究機関として認められることを意味するのである。つまりUKRIから研究資金を受ける資格を得て、さらなる研究活動を継続できるということである。デザイン・ミュージアムは研究拠点としての能力を高め、卓越した施設へと成長したことを示している。なんという飛躍であろうか。あの埃まみれが。これは足を運ばなくては。

建物はロンドンのハイストリート・ケンジントンに位置しており、1960年代に建てられたグレードIIIに指定されているものである。以前はコモンウェルス・インスティテュートとして利用されていた建物が、10年間の空き家期間を経て、21世紀にふさわしい最先端のデザイン技術と空間設計によってデザイン・ミュージアムとして生まれ変わった。確かに60年以上前の建物とは思えないほど、現代的なものである。

ここの博物館の研究文化は、歴史的なコレクションの研究よりも、デザインが変化の最前線で果たす役割を反映することに重点を置いている点で、他の博物館とは一線

を画している。過去のデザインにこだわるのではなく、現在進行中の社会の変化に対応しながら、デザインの未来を研究・実践する場である。

2021年11月に開始されたFuture Observatoryは同博物館がAHRCと提携して実施する、Green Transitionのための3年間の国家研究プログラムである。全国的なハブおよび博物館内の研究部門として機能し、環境問題に関する新しいデザイン思考を推進している。

また館内Residency Studioという一角があった。ここでは気候緊急事態に対応する研究を行う新進のデザイン研究者を支援するために設立され、2007年から2020年まで実施された博物館のデザイナーズインレジデンスプログラムを基にしている。このレジデンスは、AHRCと提携して実施されるデザインミュージアムの未来観測所の一部である。



館内にあるレジデントスタジオ、研究している中の様子がわかる

ここでは、若手のデザイン研究者に、通常的环境から離れて新しい作品を開発および制作するための時間と空間を提供することと、デザイン・ミュージアムの来館者に実際のデザイン研究プロジェクトに参加する機会を提供することという2つが主な目的がある。

またここは研究者が作業する場所であると同時に、完成したプロジェクトを展示するスペースも提供する。プログラム期間中、選ばれた研究者は指導と給与を受け取り、その研究はデザインミュージアムが企画、編集する公開イベント、展示会、出版物を通じて公開される。毎年異なるデザイン分野で研究する4人の研究者を受け入れ、その年のテーマと概要に対する個々の反応を開発する。このような躍進を聞くと、近年アート系に関する資金減少の話をよく耳にするが、“埃まみれ”時代を知っている私は思わず“がんばれ”と言いたくなった。

常設展示では、我々の身近で日常的に使用していたものの移り変わりを見ることもでき、コンピューターや近代機器の展示では懐かしいものが出てくる。来館者の一人が1980年代当時人気だった小型音楽再生機ウォークマンを指さして、“これでマイケル・ジャクソンをよく聞いたよ。”と、昔を懐かしむ会話も聞こえてきた。

そして最後に、長らく会っていなかった昔の知り合いとも再会ができた。そう、あのやかんたちである。どのようになっているかはぜひ皆さんの目で確かめてもらおう。

(JSPS London Research Administrator 山田 泰子)

Events organised/supported by JSPS London from July January 2025 to March 2025

- ❑ JSPS London Symposium & Seminar Scheme
“Emotional Pathways: Regulating Emotions for Safe walking travel in Dementia”
@University College London
21st February 2025

“Robotics, Religion and Ethics”
@University of Manchester – Engineering B_2B.025 M&T
28th February 2025
- ❑ Information Event:
@ Queen’s Mary University of London (27th January 2025)
@ University of Ulster (4th January 2025)
@ Queen’s University of Belfast (5th January 2025)
@ University of Bristol- online (12nd February 2025)
@ King’s College London (19th February 2025)

Future events organised/supported by JSPS London

- Information Event:
@Malta FA (online)(6th May 2025)
- Pre-departure Seminar
@JSPS London (23rd April 2025)

JSPS Fellowship Programmes & International Collaborations

Application Schedule for FY2025

Fellowship Programmes

*The Pre/Postdoctoral Short Term programme is also managed by other JSPS overseas offices in Europe and USA independently. For more information, please check their websites.

Programmes	Suitable Applicants	Apply to	Recruitment	2025										2026			
				Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec	Jan	Feb	Mar	Later	
Summer Programme (LON call)	Pre/Postdocs	JSPS LON	FY2025									TBA					Mid Jun to Mid Aug 2026
Pre/Postdoctoral Short term (1-12m)		JSPS TYO	1st Call (FY2026)							TBA							Apr2026-Mar2027
			2nd Call (FY2025)										10th			Aug2025-Mar2026	
			3rd Call (FY2025)			6th						Dec2025-Mar2026					
		JSPS LON	1st Call (FY2026)									28th				JUL2026-Mar2027	
			2nd Call (FY2025)		26th							Nov2025-Mar2026					
Postdoctoral Standard (12-24m)	Postdocs	JSPS TYO	1st Call (FY2026)					TBA								Apr2026-Sep2026	
			2nd Call (FY2025)	25th					Sep2025-Nov2025								
		Royal Society	FY2025	TBA												Sep2026-Nov2026	
		British Academy	FY2026	TBA												Apr2026-Nov2026	
Invitational: Long Term (2-10m)	Mid Career to Prof level	JSPS TYO	FY2025									TBA				Apr2026-Mar2027	
1st Call (FY2026)							TBA								Apr2026-Mar2027		
2nd Call (FY2025)			25th											Oct2025-Mar2026			
BRIDGE Fellowship	Alumni Members	JSPS LON	FY2025									8th				JUL2026-Mar2027	

Application period or deadline

Fellowship starting time

International Collaborations

*The following schedule is for the researchers on the Japanese side.

Programmes	Suitable Applicants	Apply to	Duration	2025										2026			
				Apr	May	Jun	July	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec	Jan	Feb	Mar	later
JSPS London Symposium & Seminar	Alumni & JBUK Members	JSPS LON	Symposium: 1-3 days Seminar : 1 day												TBA		JULY2026-Mar2027
Bilateral Programme [A]	Research Groups	JSPS TYO Royal Society	Joint Project: Max 2 yrs							TBA							TBA
Bilateral Programme [B]		JSPS TYO	Joint Project: Max 2 yrs							TBA							Apr2026 – Mar2028 (MAX)
			Joint Seminar: Max 1 week							TBA						Apr2026 – Mar2028 (MAX)	
Core to Core Programme	Institutions/ departments	JSPS TYO	Max 5 yrs								TBA						Apr2026- Mar2031 (Max)

Application period or deadline

Project starting time

*Please note that the timeframe for calls is subject to change, check the JSPS London website for the latest information.

*When you apply to JSPS Tokyo, please note that the application periods and deadline above are for the head of the host institution to submit the applications to JSPS Tokyo. The time frames for host researchers to submit their applications to their institution are normally earlier. Therefore, Fellowship candidates must discuss their preparation schedules with their host researchers. Please also check each website for more details.

Programme Contact Information List

Fellowship Programmes

■ Summer Programme
(London call) [JSPS London](#)

■ Postdoctoral Standard
[JSPS Tokyo](#)
[The Royal Society](#)
[The British Academy](#)

■ Invitational Fellowships
[JSPS Tokyo](#)

■ Pre/Postdoctoral Short Term
[JSPS Tokyo](#) [JSPS London](#)

■ BRIDGE Fellowship
[JSPS London](#)

International Collaborations

■ JSPS London Symposium/Seminar Scheme
[JSPS London](#)

■ Bilateral Programme
[JSPS Tokyo](#)

■ Core to Core Programme
[JSPS Tokyo](#)

■ JSPS International Joint Research Programme
[JSPS Tokyo](#)

今号では、“ぼりーさんの玉手箱”および“山田さんの徒然なるままに”はお休みいたします。

Follow us on ...

- For Japanese researchers in the UK or RoI/ 在英・アイルランド日本人研究者の皆様、ご希望の方に、JSPS London が開催するイベントのご案内やニュースレター等をお届けしています。対象は、英国・アイルランドの大学・研究機関に所属する研究者（ポスドク・大学院生含む）及び在英日系企業研究所の研究者の方々です。下記リンクにてご登録ください。

<https://ssl.jsps.org/members/?page=regist>



- JSPS Tokyo が運営するJSPS Monthly（学振便り）は、JSPS の公募案内や活動報告等を、毎月第1月曜日にお届けするサービスです（日本語のみ／購読無料）。情報提供を希望される方は、下記のリンクにてご登録ください。

<https://www.jsps.go.jp/j-mailmagazine/index.html>



日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター (JSPS London)
14 Stephenson Way, London, NW1 2HD, United Kingdom
Tel : +44 (0)20 7255 4660 | Fax : +44 (0)20 7255 4669
E-mail : lon-info@overseas.jsps.go.jp | <https://www.jsps.org>

JSPS London ニュースレター
監 修：小林 直人
編 集 長：妙見 由美子
編 集 担 当：山田 泰子